

FELLOWSHIP NEWS

フェローシップ・ニュース

アジア太平洋地域
アディクション研究所

FELLOWSHIP NEWS

2003年10月1日 発行
発行定日 毎月1回1日発行

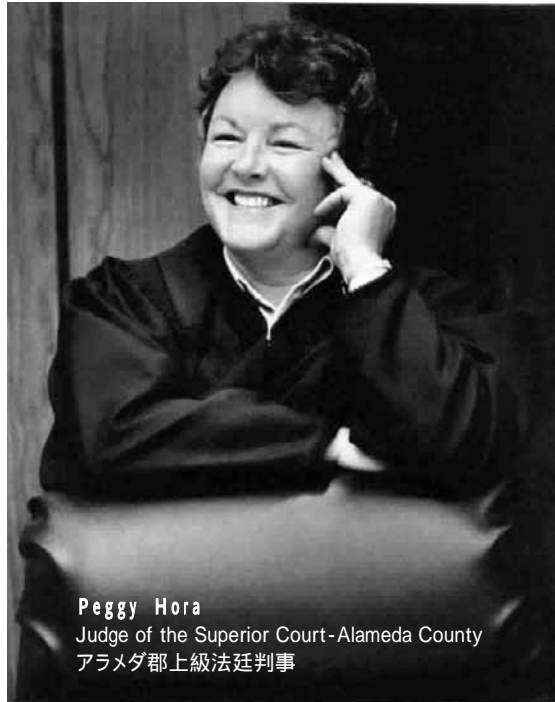
ペギー・ホラ判事に会いに行こう！

米国ドラッグ・コートの第一人者が来日

薬物治療法廷、ドラッグ・トリートメント・コート(DTC)は、約13年前にアメリカで生まれた画期的な裁判制度です。薬物事犯者に対して刑罰を科すのではなく、治療・回復プログラムを選択させるのです。

DTC運動創始者のひとり、ペギー・フルトン・ホラ判事がこのほど来日し、東京と大阪で講演して下さることになりました。

欧米で現在もっとも関心の高いこの司法システムについて、情熱を込めて語るホラ判事のお話を、みんなで聞きに行きましょう！



Peggy Hora
Judge of the Superior Court-Alameda County
アラメダ郡上級法廷判事

ホラ判事からのメッセージ

「日本でもDTCの手法はきっと有益なものだと思います。『服役・懲役よりも治療を』というテーマへの私の情熱を、日本の皆さんにお目にかかって、ともに語り合えるのを楽しみにしています」

大阪講演 お問合せ:フリーダム/06-6399-4999
主催:フリーダム、大阪ダルク、大阪弁護士会
2003年10月27日 午後6時30分より(開場6時)
大阪弁護士会館6階ホール

東京講演 お問合せ:東京ダルク/03-3807-9978
主催:東京ダルク支援センター 後援:日本弁護士連合会
協力:フリーダム、東京ダルク、NPO法人アパリ、
国立精神・神経センター
2003年10月31日 午後6時
国立オリンピック記念青少年総合センター 102研修室
定員200名 定員になり次第締め切らせて頂きます。
資料代1000円

尾田、ドラッグ・コートを語る！

平成14年度の中央共同募金会助成事業「薬物依存症の調査・研究のための海外研修事業」で、尾田真言(アパリ事務局長)がアメリカのドラッグ・コート制度を視察しました。

以来すっかりドラッグ・コート・ジャンキーの尾田真言が、本号で6ページにわたり、研究結果を発表しています。ホラ判事の来日講演前にお読みくださると幸いです。

写真左上:フロリダ州マイアミ・ドラッグ・コート 下段左:サンフランシスコドラッグ・コート 中:被告人が立つ証言台 右:マイアミでの研修風景



「アディクションの時代を語る」(後半) 斎藤学 & 近藤恒夫 8ページ～

目次:

ホラ判事に 会いに行こう!	1
ドラッグ・コート制度研修報告 日本にもドラッグ・コートを	2
尾田真言	
フェローシップ対談 アディクションの 時代を語る(後編)	8
斎藤学 & 近藤恒夫	
日本アディクト烈伝 その2 辻本俊之	16
俺はヤク中ではなかった!	
サルでもわかる アディクション講座	24
ラブ&マーシー 神無月才生	26
「出会いと別れ」 安高真弓	27
アパリ藤岡 アウェイキングハウス	28

APARIの

フェローシップへ

ようこそ!

APARIとはアジア太平洋地域アディクション研究所(Asia-Pacific Addiction Research Institute)の略称です。

全国のD.A.R.CやM.A.C.の各施設、教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする仲間たちの手助けをしているシンクタンクです。

アメリカのドラッグ・コート制度研修報告

日本にもドラッグ・コートを

尾田真言（アパリ事務局長）



皆さんこんにちは、アパリの尾田でございます。

今日は、中央共同募金会さんから頂きました海外研修費用を使って、アメリカのドラッグ・コート制度というものを……増えつつける薬物事犯に対する新しい裁判制度なんですけれども、薬物依存症という問題に対し、司法の立場からいかにして回復を支援するのか、こういった新しい制度を研究させて頂くことができましたので、ご報告させていただきます。

ただし、アメリカには50の州がありまして、州ごとに刑法典というものがあります。ですから州によってドラッグ・コート制度の内容に微妙に違いがあります。私はこのたび、ホノルル、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ニューヨーク、マイアミと5つのドラッグ・コートを見してきました。州でいいますとハワイ州、カリフォルニア州、ニューヨーク州、フロリダ州と4つの制度を見てきた、ということをまず、前置きさせていただきます。

ドラッグ・コートとは？

私がどうしてドラッグ・コートという制度に興味をもったか、といえますと……実際に見に行くまではこういう制度だと思っていました。「あなたはリハビリ施設に行きますか、それとも刑務所に行きますか」と。

実はそうではなくて、裁判官が、ひとりの被告のプログラムの開始から修了までを見続ける。日本でいう保護観察官のようなことを、裁判官自らが行っている。決して、「リハビリ施設に行け」と丸投げするような制度ではなかった。

では、どういうものか。概略をお話したいと思います。

単に薬物使用だけではなく、薬物使用によって窃盗ですとかほかの犯罪を犯してしまった人もこの手続きに乗ることができる、というふうに規定している州が多いです。

そういった人々を通常の刑事司法手続きではなく、薬物依存から回復させるための治療的な手続きに乗せて、その経過を裁判官が法廷で見守る。そのトリートメントの修了時までの約1、2年の間、あくまでも一人の裁判官が、その人がプログラムの終わりまで、せいぜい月に……最初のうちは2、3回だそうなんですけれど、裁判所に出頭させて、手続き全般を集中的に監督します。そしてプログラム修了者に対しては、公訴棄却等により裁判を終結させます。つまり、起訴はされたんだけど、立派にプログラムを修了したから、判決の言い渡しをすることなく、もうそれで裁判は終結させましょう。そういう制度なんです。前科にもなりません、判決の言い渡しが無いんですから。

そのプログラムの主体となっているものは、自助グループでのミーティングです。必ずしもAAとかNAに限らず、その人に最も適したプログラムを受ける、ということです。裁判所は参加者に対し以下の3点を義務付け、ちゃんとやっているかどうかチェックしています。決められた日に出廷すること。そして 自助グループにちゃんと出ているかどうか、薬を使わないでいるかどうかを尿検査によって明らかにする。

入寮型のリハビリ施設に処遇を任せしてしまうものではありません。自助グループに定期的に参加しながら、社会の中であくまでも普通に生活することを、裁判所が支援するのです。

裁判所は、さまざまなトリートメント・プロバイダーと呼ばれる、プログラムを提供するグループと契約で結ばれています。このトリートメント・プロバイダーというのは、必ずしも、薬物依存のリハビリ施設だけではありません。例えばニューヨーク州ブルックリンのドラッグ・コート(ブルックリン・トリートメント・コート、以下BTCと表記)は、NAやAAをはじめとする自助グループ、治療共同体、医療機関、セラピスト、DV(夫婦間暴力)のシェルター、食

料支援、支給団体、法律扶助団体。そういった150箇所のトリートメント・プロバイダーと契約して、一人一人がニーズに応じた処遇を受けられるように考慮しています。

何故、裁判所がそこまで参加者の面倒を見るのかといえますと、クスリをやめるためにはなによりもまず、クスリをやめられるような環境をつくらなければいけないからです。たいていのドラッグ・コート参加者は、やめて普通の生活を送っていくにあたっての障害を抱えているのです。だから、言い訳をする。例えば「自分は働かないと、借金があるから、こんなプログラムなんか悠長に受けている場合じゃないんだ」と言うわけです。でも現実には、すぐクスリが止まって社会復帰なんてできない。そういう人にはその借金の問題を解決するような……日本で言うところの、破産免責制度のような、そういったことを裁判所が紹介してくれる。そうやって、回復のためのさまざまな障害を、裁判所が取り除くことをする。そういった制度が実際にあるんです。

これは日本では考えにくいことです。アパリは今、裁判所と契約というものはありません。我々のプログラムに対しては確かに「アパリ藤岡研究センターで薬物研修プログラムを受けること」を条件とした保釈決定が出ていますが、これは別に裁判所との契約ではなくて、被告人と裁判所との間の約束で成り立っているだけです。そうではなく、裁判所がお金を払って、各プロバイダーに委託する契約のもとに、ドラッグ・コートの参加者に対しプログラムを実施、処遇をするのです。

ではドラッグ・コート制度の中で、ダルクのような入寮型リハビリ施設というのはどの段階で出てくるのかといえますと、後述するようなサンクションを受ける段階を経たにもかかわらずリプスを繰り返し、「あなたはどうも、社会の中で通常に仕事をしながら、この裁判所のプログラムに乗ることは難しいようですね。それならば、入寮型の施設に入りなさい」ということになって、はじめてリハビリ施設というものが登場します。そうすると、1年半とか2年とかかなり長期にわたってリハビリ施設に行くことにもなります。だから決して、最初の段階から裁判所が「あなたは刑務所に行きますか、それともリハビリ施設に行きますか」と選ばせているわけではないんですね。



各地のドラッグ・コートのある裁判所
 (左上) ニューヨーク・ブルックリン上級裁判所
 (左下) ロサンゼルス少年裁判所
 (右上) ハワイ州の第一巡回裁判所
 (右下) ロサンゼルス郡刑事裁判所

リラプスは回復の一段階

前述のとおり、参加者は出廷時、尿検査を義務付けられています。

尿検査で陽性になったらどうするか。日本だと即、刑務所に3年というわけですが、アメリカのドラッグ・コート制度においては、「リラプスは、当たり前である」と……依存症の人がまた使ってしまうこと、というのはきわめてよく見られることであって、それは回復の一段階であることを、ドラッグ・コートにかかわるスタッフ・専門家の全員の間で、常識として認識されているんです。

ですから、尿検査でプラスが出たからといって刑罰が科されることは原則としてありません。「サンクション」……法律によるものでなく裁判官が自らの権限で、自由裁量によって課す「制裁」というものを受けますこととなります。

具体的にどのような制裁か、BTCの例でご説明します。

だいたい「有罪判決が出ました」というそれだけで、今まで長年使ってきた薬物がびたっと止まる、なんてありえない。ダルク入寮者のお話を聞いても、たいていは「判決言い渡しのその日から使っていました」と言いますが、これはある意味当たり前です。そこでBTCでは、初めてドラッグ・コートに乗った被告人の場合、90日の間に5回の陽性反応が出た場合、または尿検査を受けなかった(例えば陽性が出て、あと2回受けなければならないのに受けなかった)場合、はじめて第1回目のサンクションが課せられます。

サンクションの内容は、例えば2日間まる一日、朝から晩まで、他のドラッグ・コート参加者の全手続きを傍聴させるというペナルティが、一番軽いサンクションとしてあります。もうひとつは、反省文といいますが、現在の心境を書かせて、提出させるというもの。あるいは、1日ないし2日のあいだジェイルに入れる……たった1日か2日なんですよ。

そのサンクションの目指すところは、決して懲らしめではなく、やめ続けるために励ます。そういう立場でやっている。リラプスしたからといって刑務所に入れられるようなことはありませんから、参加者は正直に振舞い、逆にそのリラプスを自分の回復の動機付けにすることができるし、裁判所もそれを応援する。

いま日本では、とまかく7年空いていれば再度の執行猶予がありうると言いましたが、その7年の間ずっと使っていた、あるいは精神病院に入退院を繰り返していたということが証拠上明らかになると、たとえ7年空いていても、10年空いていても実刑になってしまう。それがわかっている被告人の人は、みんな嘘をつくわけですね。正直に喋ったら刑務所に入れられるような中で、誰が正直にものを言うかということになってしまう。逆にドラッグ・コート制度においては、みんな正直に振舞うことができます。使ったら、「使ってしまいました」って言えるわけです。

先日アバリ藤岡研究センターに、法務省の職員が泊りがけで研修に来られ、近い将来、かどうか知りませんが「将来ぜひ、ビジネスとして契約したい」という非公式の打診を受けました。つまり法務省では、国の方針としても、ゆくゆくは民間と契約をしながら、刑務所だけではなく回復のために必要なそういった社会資源を使っていこうと考えている。

しかし一方で厚生労働省は……これは厚生省の研究班に出ているびっくりしたのですが、刑罰の威嚇力を利用して……つまり刑務所に行くのは怖いからと脅してクスリをやめさせよう、と。まだそんなことを言っているお役人も結構いらっしやるんですね。

厚生労働省というのは本来、薬物依存症という病気に苦しむ人々を支援するべき立場にあると思うのですが、いま彼らがやっていることは、麻薬取締官というものを用意して、密輸組織などの大掛かりな犯罪のみならず、末端の依存症者まで摘発している。それで捕まえてどう処遇するかというと、厚生省には依存症の施設というものはない。刑務所に入れるしかないわけです。その結果……いま現に、日本の刑務所は過剰拘禁状態といって、収容定員を超えています。その中で薬物事犯の人が男性で3割、女性で5割です。

なお、アバリ・ダルクは、刑法に触れる薬物を使ったからどうこう、という姿勢でやっているのでは決してありません。使用している薬物の種類、合法・非合法の別にかかわら

ず、同じプログラムを提供しています。

おびたしい数の薬物が世の中には存在していて、の中でごくごく一部の薬物だけが、刑罰によって厳しく規制されているに過ぎない。あとの薬物には全く規制がないわけです。薬局で売ってる咳止めをどんなに飲んだって、それはなんら犯罪を構成しませんし、精神病院で処方される薬が大好きでたくさん飲み続けたって、それに対する何の規制もない。しかし「薬物依存症」という病気は、使用する薬物の種類や量によって決まるものではありません。合法・非合法の別にかかわらず、回復のためのプログラムとケアが必要なのです。

そうすると、アディクション(依存症)という病気を知らないお役人さんが言うように、刑罰の威嚇力を使って依存症を回復させよう、というのはナンセンスですね。法で禁じられているから、使ってはいけないから罰する。そういう方法では何も変わらない。

例えばアバリ・ダルクでは、薬物依存症の人たちにとってはアルコール薬物の一種であり、他の違法薬物の摂取と同じく、やめなければいけないものと考えます。それはアメリカのドラッグ・コートでも同じです。法規制の有無に関わらず、精神作用性物質の摂取が自分にとってはいけないことなんだ、という考え方なのです。尿検査も、アルコールの検査っていうのもあるんですよ。アルコールも、鎮痛剤も、睡眠薬も同じだと。そういうことにちゃんとなっている。

ということで、私がドラッグ・コートに関心を持った一番の理由は、刑事司法制度そのものが、乱用者の回復を考えてくれている制度だからだ、ということなんです。

リハビリ施設とリカバードの役割

ここで、リカバード(薬物依存症からの回復者)の活躍について触れてきたいと思います。

裁判所と提携している入寮型のリハビリ施設を見学してきましたが、どこでも必ず、リカバード・カウンセラーが働いています。施設長とかスタッフの人はほぼ間違いなくリカバードです。薬物依存症の施設に必須なのは、薬物依存症から回復した本人なんです。だから、それをどう育成していくのが大問題になってきます。

アメリカでは、カウンセラーになるには州の資格が必要になります。ですから、依存症本人が、その経験を活かして社会的に奉仕できる場があるんですけれども、そういったポストにつくためには、ちゃんとトレーニングを受けないといけない。日本ではどうか。ダルクはやはりリカバード・スタッフの手で運営されています。日本ではまだ、リカバードが資格をとって社会の中で自らの経験を生かしていけるようなシステムが未整備で、公的な資格を取得するところまで手が回らないまま、クリーンの長い入寮者がスタッフになっている、というのが現状です。

日本でもアメリカのようにしようと思っても、法律の制約があって、そういった前科・前歴のある回復者が国家公務員や地方公務員にはなれな



薬物依存症リハビリ施設

(左)マイアミのThe Village

(右)Asian American Recovery Service Inc.サンフランシスコの施設。裁判所の委託を受け、尿検査を実施している。

い、リカバードを国が雇うことは難しい、という現状があります。ですから民間委託すべきなんですね。前述したようにアパリ藤岡研究所にも、法務省から提携のお話があったんですよ。そういうふうになっていくべきだと思います。

どういった人がドラッグ・コートの裁判官になるのかというと、必ずしも裁判官のキャリアをはじめから持っていた人とは限らないというのが、日本と違うところですね。例えば長い間弁護士をしていて、その後高校の教員になって、それから初めてドラッグ・コートの判事として任命された、といった経歴の人が結構います。元検察官だった人もいます。

あと特徴的なことは、非常に任期が長い。日本だと3年に1回位転勤があったりするわけですが、アメリカで初めてのドラッグ・コート裁判官(マイアミのドラッグ・コートの初任者)は、10年も同じポストにいたそうです。私がお会いした現職のロジネック判事で二人目だそうです。この後任者を探すときに非常に問題になる。薬物問題に詳しい人じゃないとドラッグ・コートの判事は務まらないんだ、ということで、その人選は大変だという話を聞きました。裁判官はみんな、薬物依存症は何であるのかという教育を十分に受けた上で、このポストについている、ということです。

2002年11月の統計では、アメリカで全州にドラッグ・コートの制度があり、2年以上ドラッグ・コートをやっている裁判所が、全米で804の裁判所。2年以内、ないしは計画中というところが507の裁判所ということで、約1300の裁判所でやっている。ですから、おそらく近い将来全ての裁判所において薬物問題、薬物がらみの犯罪というのは、ただ刑罰を科すだけではなくて、治療に向けたものが全てで行われるということになります。

今までのところ、約30万人の成人、1万2500人の少年がドラッグ・コートに参加したということです。

日本とアメリカの人口比ということを考えても、アメリカは日本のせいぜい2、3倍です。単純に数を比較する前にアメリカと日本の状況の違いを説明しなければいけないんですが、日本の場合、刑務所の収容人員は約6万

人なわけです。アメリカは今、200万人なんですね。日本では地方裁判所というのは100も無いわけですが、アメリカは日本の地方裁判所にあたる裁判所が約1300位あります。人口比から考えても、ぜんぜん桁が違います。アメリカ社会の犯罪の多さを立証する数字ですね。

では、アメリカほどには犯罪の起きていない日本では、アメリカの裁判制度が参考にならないかといえば、決してそうではない。犯罪の凶悪化や薬物汚染の蔓延など、社会の病理が急速にアメリカ化している現在、まさに先手を打って、こうした制度の導入を検討していくことにこそ意味があるはずですよ。

ドラッグ・コート成立の背景

では、アメリカのドラッグ・コート制度がどのような背景で出来上がってきたのかということ、簡単にお話したいと思います。

この裁判制度がアメリカで最初に出来たのは、1989年、フロリダ州の裁判所でのことです。

1989年の夏に、アメリカで最も薬物問題で苦しんでいたのは、フロリダ州デイド郡のマイアミ市でした。ここで今から14年前に初めてドラッグ・コートという制度ができました。

当時マイアミでは、今の日本と同じですね、過剰拘禁が問題になっていました。たくさん薬物で捕まる人が出てきたときに、みんな捕まえてそれを裁判にかけることが物理的に不可能になってくる。その人たちを一体どうしたらいいんだ、とみんなで知恵を出して作り上げたのがドラッグ・コート制度だった。

マイアミ市でこのプログラムを最後まで修了した人の再犯率が、わずか6%であるということが報告されています。日本では今この数字は50%です。どこでその差が出るのかというと、やっぱり依存症回復のためのプログラムがあるか、無いかなんですよ。この制度が今、非常に上手く機能している、ということがいえると思います。

ここで強調しておきたいのですが、ドラッグ・コートはいわゆる自由化政策とは違います。フロリダ州でそうであったように、刑事司法制度の破綻、過剰拘禁問題に対する方策として、非犯罪化、刑事司法の介入を止めてしまうという自由化政策があるかと思いますが、確かにドラッグ・コートでは、刑務所へ入れるといった刑事罰を科すことは回避していますが、決して自由化ではありません。刑罰の威嚇力と報奨制度を利用して……鉛と鞭ですね。なんとかプログラムを最後まで達成させようと、そういう理念でやっている訳です。「非刑罰化ではあるが、非犯罪化ではない」という言い方が出来ると思います。

ドラッグ・コートの特徴 BTCを例に

どういう精神でドラッグ・コートというのは運営されているのかということについて、BTCで受けた説明を簡単にまとめたものがありますので、みていただきたいです。

薬物事犯者の中には、どうせ自分には薬物を止められないとか、止めても意味が無い、という捨て鉢な考えになっている人が非常に多い。そういう人に対しドラッグ・コートはどうして機能するかというと、社会的に権威があるとされている裁判官が自ら、そうした人たちに褒めたり励ましたりすることが、トリートメントを継続する動機付けになっている。そうやって最後まで卒業すると、修了式というものがあります。

BTCの場合、早くて1年、長ければ2年くらいの期間をかけて、フェイズ1~3の3段階あるプログラムを全部修了していくわけですが、3段階まで修了したときには、盛大な、卒業式のような、本当にパーティのような修了式をやるんだそうです。「よくプログラムを修了しました」ということですね。そういうことが励みになっている。

トリートメントの成功の第一歩は、自分が薬を使ってきたことは「依存症」という病気だったということに気づくことから始まる。薬物をいつでも止められると勘違いしている被告人が、非常に多い。だけれども、プログラムを受けているうちに、依存症であること……自分の意志の力だけではやめられないことに気づいていく。NAの第一ステップですよ。無力であることに気づくことから回復が始まる、ということが、常識として受け入れられていく。

ロサンゼルス郡の刑事裁判所で、非常に興味深いことがありました。

昼ごはんを食べながら、NAメンバーから、薬物依存からの回復に必要なものは何なのか、そのミーティングで何をやっているのか。そういった説明を、ロサンゼルス郡の刑事裁判所の全裁判官が一堂に会して説明を受けている。私もここにたまたま参加することができました。

もちろんドラッグ・コートの裁判官は、こういった知識が豊富だからこそ、そういったポストに任命されているわけです。しかし一般の裁判官はやはり、ドラッグを自分が好きで使っているんだから、それは悪いことだから特別な考慮を払う必要は無いと考えている。そこで、ドラッグ・コートの判事が自らこういった提案をして、NAメンバーを招いて直接説明を受ける。そういう勉強会を開いていました。



(上)勉強会の様子
(右)真ん中が、ロサンゼルス郡のドラッグ・コート判事のディアツツさん。左は龍谷大学の石塚教授。





(右) BTC (ニューヨーク州ブルックリン・トリートメント・コート) のスタッフたち。
(左) 左が、BTCのフェルディナント判事。

・特に女性の場合、女性の犯罪は、薬物問題に起因していることが、男性に比べてはるかに多い。ですから、女性特有のニーズに合わせた対応ができるような施設と、裁判所は契約している。そのため、BTCでは他の地域のドラッグ・コートに比べ、女性のケースの成功率が高くなっている。

・特にBTCで特徴的なことは、他の州のドラッグ・コートの場合は、暴力犯罪者は対象者から除かれることがほとんどです。参加者は拘禁されることなく社会の中で生活するわけですから、他にまた危害を加える可能性のある人を対象にすることはできない。ということで、窃盗などだといひんですけど、暴力犯罪者は除くことが多い。しかしBTCでは、来た以上は誰でも受け入れるという方針でやっている、という説明を受けました。

・BTCはトリートメント・プロバイダー150箇所と契約し、一人一人がニーズに応じた処遇を受けられるように努力している。

・BTCの目的は、ただ単に、薬物を使っている人を見つけてトリートメントを受けさせる、というだけではなく、回復させることである。その道のりは大変長いから、小さなステップから始めなければならないし、すぐに結果が出るものでもない。再使用は、回復のための一過程だということを認め、刑罰ではなくサンクションを課す、あるいはうまくいったときに褒美をあげたり、ということで、続けていけるよう励ます。サンクションというのも「失敗したから罰する」のではなくて、勇気づけるために使っている、ということでした。

・薬物をやめること自体はそれほど難しいことではないけれども、やめ続けることは大変である、と認識している。では、やめ続けさせるためにはどうしたらいいか。まず住むところが必要で、定収入の得られる仕事が必要である。それから、ドラッグと無縁の友達がいるといった、普通の生活をさせることが何よりも重要である。そうした暮らしができるようにいろいろ腐心している、ということです。

・アメリカでも通常の刑事司法制度においては、こうしたアディクションをめぐる諸問題が軽視されてしまっていますが、ドラッグ・コートにおいては、こういった当たり前のことの大切さがよくわかっているわけです。

BTCの判事に、ドラッグ・コートについていろいろ質問してきたので、紹介したいと思います。

まず「ドラッグ・コートに乗るか、通常の司法手続を経て刑務所に行くか、被告人に選ばせているのか」と質問しました。

ドラッグ・コートの手続を受けるかどうかは、裁判所とその被告人との間の契約によって成り立つものです。薬物犯罪あるいはそれに関連する犯罪を犯して逮捕された人が、裁判所と契約をする。「自分は通常の裁判を受ける権利は放棄します。その代わりに、ドラッグ・コートの手続に従います」と、そういう契約書を提出して、この手続に乗ることになります。

ということで、ドラッグ・コートに乗る以外の手続を与えません」という説明を受けたのですが、よくよく考えてみたら、「与えない」というのは法的には難しいんじゃないかと思ひ、さらに質問してみました。すると、「できるだけ、ドラッグ・コートを受けない、という選択をさせないようにしている」ということでした。

まず最初に、逮捕した段階で、検察官やソーシャル・ワーカーや、あるいは裁判所が、被告人に「ドラッグ・コートというのは、こういう司法的な制度なんだ」ということを説明します。そうすると90%の被告人はその段階で受け入れるんですが、ごくごく少数の人たちは「どうせそんな、やめたって意味

ないからトリートメントなんていらぬ」と言うそうです。しかしドラッグ・コートのプログラムがいかにも有用であるかということを知っている、最初の段階では「受けたくない」と言っている人たちにも、とりあえず裁判所に行って手続を傍聴しなさい、と。実際に見せるそうです。そしてその裁判所の中で何が行われているのかということを見てもらって、それで納得させているんだ、という説明を受けました。それでもまだ「こんなプログラムは受けたくない」といっている人は非常に少ない、ということです。

ところで、ニューヨークのドラッグ・コートには、「ブルックリン・トリートメント・コート」という名前がついています。「トリートメント」というのは、「治療」とか「処遇」という意味です。つまり、薬物裁判所、ではなくて「ブルックリンの治療法廷」という名前がついているわけです。そのことを彼らは非常に誇りに思っています。自分たちは単なる刑罰を科すだけの裁判ではなく、問題を抱えた人たちの、問題を解決するための裁判をやっている。そこが特徴なんだ、とっていました。

どうしてトリートメントを受けたくないという被告がいるんですか、と質問しましたら、「そういう人たちの多くは、自分に薬物はやめられない、と思っている。また、もしやめられたとしても、自分の人生は変わらない、と思っている」と。そういう捨て鉢な気持ちを持っているから、トリートメントはいらぬ、というふうに言うんだらう、と。

あるいは、「トリートメントを受けます」という人の中にも、「刑務所に行くよりは簡単だらう。今まで自分はずっと、人をだまして生きてきた。裁判所のスタッフをだますのも簡単だらう。口だけで「やめたい」って言って、適当にプログラムやって、それでもとの生活に戻れるんだからいいや、と。そういう動機で参加を表明する人もいるわけです。

そうすると、どっちがより回復するか、と考えたときに、かえって最初に「トリートメントを受けたくない、薬物をやめたって、いいことなんて何も無いんだ」と言っていた人たちのほうが、かえって熱心にプログラムに取り組むことのほうが多いそうです。

それから3番目に聞きました。私は留置所や拘置所に薬物事犯で捕まっている人に面会に行くと、「少なくとも判決言い渡しまでの間、群馬県の藤岡の施設でプログラムを受けてみませんか」ということを勧誘しに、全国を回っているわけですが、「自分は、乱用はしたけれど依存症じゃない



ハワイ州のJuvenile Drug Court (少年薬物裁判所)。
後列左が判事のマーク・フローニンクさん。

ハワイ州では、通常の成人ドラッグ・コートのほかに、家庭裁判所のドラッグ・コートと、少年裁判所のドラッグ・コートの法廷を見学することができました。

家庭裁判所のドラッグ・コートでは、薬物問題を抱える両親による児童虐待の問題を取り扱っています。そこでは親へのドラッグ・トリートメントのプログラムを、子どもの保護という観点から行うために、家庭裁判所の中にあるのです。

少年裁判所では、未成年の薬物事犯に対する法廷が行われているわけですが、少年の段階で薬物に深く関わっている人たちの生育層には、非常に悲惨な状況があります。その問題をなんとかしないと、ただ薬を止めたところで何も解決にならない。

ということで、裁判官は非常に苦心していました。本当に励ますんですね。「よくできました」と、「よく一週間使わぬでいられた」と言ってメダルを渡したり、そういうことをやっていました。

んだ。やめようと思えば、いつでもやめられる。依存症のリハビリ施設に行く必要はないんだ」と言う人が結構います。特に初犯者に多いです。「どうせ初犯だから、何もしくたって執行猶予つくんだから、何もわざわざ面倒くさいことしないでいいんだ」と。そこで「プログラム受けませんか、と勧誘したときに、そういうこと言う人いませんか」と聞きました。そうしたら、アメリカでも非常によくあるケースだ、ということだそうです。しかしそういう人たちに対して根気良く説得をするそうです。「じゃあ、なぜあなたはここにいるの、なぜ裁判の前で裁判を受けてるの？」って。そういうふうに一生涯懸命説明をして、なんとかプログラムに乗るほうに説得をしている、という説明を受けました。

ドラッグ・コート法廷の実際

- マイアミのドラッグ・コートを例に

次に、実際の裁判官と被告人のやりとりを見ていきましょう。

マイアミの裁判所ではロジネック判事のご厚意により、なんと、ビデオカメラを持ち込むことを許可されました。その記録から、実際のドラッグ・コートの裁判において、裁判官と参加者がどのようなやりとりをするのかをいくつか紹介したいと思います。

まず、Aさんという人。初めて参加するAさんに対して、裁判官がまず話しかけます。「それではAさん、こちらへどうぞ、怖がらなくていいですからね」と。そして検察官が「11月13日までによく考えて、ドラッグ・コートに参加するかどうか、検討しておいてください。そうでなければ、あなたは長い間刑務所に入ることになりますよ」と。プログラムを受けるのであれば、いまのままの生活を続けながら、裁判所に出頭していけばいいんだけど、それが嫌だ、ということであれば刑事罰が科せられますよ、ということの説明をしています。それで裁判官が「11月13日ですね。では退場して、裁判所のスタッフから、プログラムの説明を聞いてください。奥さん来てるんですか？.....来てるの。じゃあ一緒に行って説明聞いてください」「ありがとうございます」「あなたのためなら何でもしますよ」と最後に言ったときに、Aさんは私たち日本人が傍聴に来ているのを知っていて、「さようなら」と日本語で言ってくれたんですね。

こうして、一人にかかる手続時間が、長くて5分。短くて2~3分ですね。驚くべきことに1時間半から2時間くらいの間に、4~50人の参加者を全部、処理するんですよ。毎日、毎日、日本では、刑事裁判では、争わなければ大体1回で結審しますが、長くて1時間で終わりです。それはすごく精密な司法、精密司法と言われるように、何月何日、何時何分ごろ、どこそこで、覚せい剤水溶液をどこにどういうふう注射してどうのこうの、ってふうに書類作って、やるわけですけど、実際に被告人と裁判官が対話する場面は5分くらいのもので、だから実質的な部分は、日本でもそんなに変わらないと思いますが、それにしてもすごいですね。

次に、Bさんの場合です。「あなたはなんの仕事をしているんですか？」「小さな野菜市場で働いています。店の名前は 住所は 通りで.....」「いい野菜を置いていますか？」「はい」「じゃ、このドラッグ・コートのスタッフが野菜買いに行ったら、安く売ってくれますか？」すると、その参加者が「ボスに聞いてみます」って、「真面目だねえ。あなたの学歴は？」「9年生(高校)まで。」「その野菜市場で、あなたはいくらもらっているの？」



フロリダ州マイアミで見かけた車のナンバープレート。アメリカではこのように自由にデザインすることができる。「Keep Kids Drug Free(子どもたちを薬物から守ろう)」のメッセージが入っている。

「よくわかりませんが、週200ドルくらいです.....2万4千円くらいですね。」「何時間働いているの？」「朝8時から夜の9時までです。」「そうすると、時給にすると.....たった3ドルくらいですよ」と。「眠くなって働いてる



フロリダ州第11巡回裁判所。
マイアミ・ドラッグ・コートのロジネック判事と(写真中央)。

のは、あなたのボスは気づいてないの？」裁判官がそこで提案をするわけです。「君には、話が2つある。ひとつは、君がやりたいかどうかはわからないけれども、学校へ行きなさい」ということを提案するわけですね。「スクール」と言いましたが、これは高校や大学ではなくて、職業訓練校のようです。そういうところで例えば、読み書きそろばんを習う.....少し計算ができるようになると、時給がもう少し高くなって、もう少しまともな暮らしができるようになる、と。ちょっと費用がかかるけれども、学校に行きなさい、ということ提案してるんですね。

それから次に.....これは何回目かの参加者です。「あなたは自分のレポートを持ってきましたか？ 見せてください.....なんかおそろく、尿検査で陽性の反応が出たりなんかしてですね、レポートを出すことをサンクション、制裁として課された人だったと思うんです。ところでNAには行ってますか」と質問をするわけです。「行ってます」「よしい。行き続けるようにしてください。くれぐれも、NAには行くように。また別の参加者とのやりとりで、こういう場面に出くわしました。「あなたは、仕事はしていますか？」「いいえ、NAに行っているの、仕事はしてません」「じゃあ、NAの12ステップを、ちょっと説明してくれませんか？」.....何も言えなかったですね、その参加者は。そうしましたら、「あなた28回もNAに行っていて説明できないんですか？ 12月10日、私はあなたにまた同じ質問をしますよ」ちゃんとNAに行つてプログラムを受けなさい、と裁判官が、NAに行くことを励まして、勧めているわけです。

わが国の現状とアパリの取り組み

では、わが国でこういうようなドラッグ・コート制度を導入できるかどうかについて、簡単に私見を述べたいと思います。

そもそもわが国におきましては、現行の刑事司法制度が、薬物をやめられなくなってしまった人たちの回復には必ずしも役立っていない、という側面があります。

覚せい剤の例をあげてお話しすると、覚せい剤を使ってしまい、何らかの事情によって逮捕された。するとほぼ確実に100%起訴されます。これが初犯であるならば、よほど大量に所持していたとか、あるいはよほど大量に取り引きしていたという証拠が出なければ、判で押したように懲役1年6ヶ月、執行猶予3年の判決が出され、そのままクソのある社会に戻されてしまいます。ひとたび執行猶予判決を受けた人が、その後またクソを使って検挙されると、執行猶予期間を満了後7年くらい経過していないと、ほぼまちがいに実刑判決になります。ましてや執行猶予期間中に再使用して検挙されるとどうなるか。それまで、1年6ヶ月執行猶予3年、という判決を受けていたわけです。そうすると次の新しい薬物使用による、検察の求刑は.....使用量や頻度にもよりますが、2年とか2年半とか求刑される。例えばそこで「判決2年」と言い渡されたと、前に執行を猶予されていた1年6ヶ月が加わって、そこでの執行刑期は3年6月になります。

アパリの保釈プログラムには、今までのところ約30名受講者がいました。私の知る限り再犯者はゼロ、成功率100パーセントです。

ただ、あくまでも今のところそうである、というに過ぎないのであって.....

薬物依存症というのは、自らの力では薬物のコントロールができなくなってしまった人たちですから、何らかの形でリハビリのプログラムを受けても、再使用してしまう……リハビリは当たり前なんですよ。ところが現行の日本の刑事制度では、再使用があるとほぼ間違いなく3年以上の長期にわたって刑務所に入らなければならない。ただ薬物を使った、そして捕まった、それだけで刑務所に3年です。

それでは、そのような厳罰主義の刑事制度が本当に、有効に機能しているのか。再犯率を指標に考えると、まったく有効に機能しているとはいえない現状があります。今、再犯率50%です。覚せい剤事犯、覚せい剤取締法違反で検挙される人の約5割は再犯者なわけです。つまりクスリをやめることができずに、刑務所を何度も出たり入ったりしている人がいるわけです。厳罰主義でクスリは止まらない、ということのひとつの証明だと思えます。

確かに、社会資源として、薬物依存症の回復支援施設としてダルクが日本には約30箇所あり、1日平均約300人が利用しています。でも覚せい剤で捕まっている人は、実人員(実際に薬物事犯で裁判を受ける人)で1万4千人くらいです。そのうち、初犯者は半分ですから7千人が、先程申し上げたように執行猶予で……なんの治療への道筋も立てられないまま、言い方は悪いですが野放しにされて再使用、再犯の道をたどる。残りの再犯者7千人は刑務所に行き、行ったからといってクスリが止まるわけではない。そういうことになります。

今の、重罰化の傾向はやはり、意味がない。覚せい剤1回目は執行猶予、と言いますが……かつては実刑だったんです。1回目でも執行猶予はつかず、半年とか8ヶ月とかの非常に短い実刑だったんです。その状況が変わったのは、深川の通り魔事件です。あの事件で「覚せい剤は危険なんだ、みんな無差別殺人犯になるんだ」という誤った理解が先行し、覚せい剤取締法が改正され、重罰化された。それで今までのような短い刑期を科すことができなくなった。でも1回目の人にいきなり1年とか1年半とかいうのは重過ぎるということで、そこから、1回目の人に執行猶予をつけて野放しにする、という政策が変わったのです。

ですから、「政策」というものは、何かことが起これば変わる可能性があるのですが、今度変わるときがあるならば、ぜひ、「回復」ということを考えたほうに変えてもらいたいと思います。

どうして日本ではこんな厳罰主義が採られているのかと考えたときに、やはり訴訟の当事者・関係者の人たちに「薬物依存症が病気だ」という認識がないからと言えそうです。しかしわが国では、平成12年4月1日施行の精神保健福祉法の改正によって、その第5条の精神障害者の定義規定の中で「精神作用物質への依存症」が病気として定義されています。でもおそらく、知らない人がいるんじゃないですかね、結構たくさん。

私は仕事の関係で、情状証人として何十回も出廷したんですが、そのとき検察官が、被告人をこう攻撃したことがありました。「あなたの言い分というのは、私は絶対に認められない」と。「依存症のい」の字もわかりませんけどね。しかし、あなたの言っていることは承伏し難い」とか、そういう言い方をしますよ。

そこでもし次に情状証人に立ったときに同じことを言われたら、密かに留意している言葉があります。「お手元の六法の精神保健福祉法の第5条を開いて下さい」と、そう言いたいんですけども……でも、裁判所では、検察官の席においてある六法って非常に古いのが多いですね。平成8年とか、9年とか、少なくとも13年度以降の六法を机に置いていないと、出てないんですけども。

ところで、大抵の被告人の場合は、約9割は……もったいもありませんけど、保釈ということはしません。すると逮捕されてから判決が言い渡されるまでの2~3ヶ月の間、裁判のために身柄を拘束されているだけで、何ら処遇はされません。これは、非常にもったいない。

この状況を何とかできないものだろうかと思ひまして、2000年の7月より、「保釈中の刑事被告人に対する薬物離脱研修」を始めました。群馬県の藤岡市の「アパリ藤岡研修センター」は、現在約30名の入寮者のいるリハビリ施設です。この中に保釈の人は、月平均0.5人程度。むしろ保釈で入ってくる人の方が例外で、たいていの人は通常の入寮という形に入っています。保釈専門でやっているわけではありませんが、保釈中の人に、判決

言い渡しまでの間の短い期間であったとしても、プログラムを提供しています。

たとえ短期間であったとしても、リハビリ施設を経験しておくかおかないか、ということには大変な差があると思います。というのは、経験してなければ、次に自由の身になったときに「そこに行こう」とは、なかなか思えませんよね。でも、たとえ1日でも、藤岡の施設に入ってミーティングに出れば、「ああそうか、リハビリ施設ってのはこういうことをやっているんだ」ということを知ることができるわけです。

ちなみに、入寮者の中にはこんな人もいました。アパリが作成した、藤岡の施設のビデオがあるんですが、それを刑務所の中で見せられて「アパリ、というものが群馬県藤岡市にある」ことを、それだけの情報を頼りに、いきなり藤岡まで来ちゃって入寮した人もいます。これ、本当なんですよ。「フェロシップ・ニュース」第3号にこの人の体験談が載っています。アパリ、ダルクの活動の実際のところ……回復者の体験談ですとか、そういうことをお知りになりたい方は、ぜひ、フェロシップ・ニュースを購読していただきたいと思えます。

ただ単に拘禁するだけでは、どうやってやめていったらいいか、ということとは普通わからないわけです。

この点、東京地方裁判所などでは、裁判官が被告人に向かって「君はなんで、このように何度も使って、捕まって、刑務所に何度も行ってのに、どうしてダルクに行かないの？」というようなことを言う裁判官も、現実にいるんですよ。

弁護士の先生方に一言申し上げたいことがあります。先生方の中には、複数回の覚せい剤事犯者に対して、「弁護のしようがないから、私選なんでもつたいないことやめて国選にしない」と言ったり、あるいは「ダルクの人を情状証人に呼びたい」と言ったら「そんなものは意味がないからやめろ」とかです。……とんでもないです。もしご関心があれば、私どもが関わってどういうことをしたら、どのように判決が軽くなったのかという実例をお私持っています。もし、弁護のしようがないと困っているならば、ぜひ一度、お電話いただきたくお願い申し上げます。裁判官の中には、やめるための努力をして、やめるためのリハビリ施設に行こう、ということを応援して下さる方も、いるんですよ。

薬物犯罪者に刑罰を科す目的は、二度とクスリに手を出させない、ということの筈です。だとすれば、従来のように刑務所に入れて、刑務作業を行わせること、その方法にそれほど効果が出ていない、というのが現実です。ほかの国で成功しているドラッグ・コートという制度があるのでしたら……導入には刑法なり刑事訴訟法なりの改正が一部必要になってくるのですくには実現しないでしょけれど、ぜひわが国でも導入するような方向に持っていきたいと思えます。

平成15年3月16日 アパリ公開講座

～薬物依存回復の可能性をさぐる～での講演を再構成
(文責: ちえぞう フェロシップニュース編集部)

編集部注

以下の文献、論文を参考にしました。詳しくはこちらをご参照ください。

尾田真言 アメリカのドラッグ・コート制度「矯正講座」第24号 2003年

尾田真言 保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム

「フェロシップニュース」第2号 2003年

尾田真言 アパリの支援プログラム -司法編

「フェロシップニュース」第3号 2003年

尾田真言 米国ドラッグ・コート制度

「フェロシップニュース」第6号 2003年



尾田真言(おだ・まこと)

アパリ事務局長、埼玉県立大学講師、龍谷大学矯正・保護研究所客員研究員。ダルクのボランティアとして家族会で無料法律相談を担当している。著書『人権論入門』日中出版『サラ金トラブル』日中出版など。写真はニューヨークの薬物依存症リハビリ施設、「フェニクス・ハウス」にて。

フェローシップ対談

アディクションの時代を語る（後半）

齋藤学さん（家族機能研究所代表） & 近藤恒夫さん（APARI副理事長）

前号のフェローシップ対談では、齋藤学さん（家族機能研究所代表）と近藤恒夫さん（ダルク創設者、APARI副理事長）のお二人に、約20年間にわたるアディクション回復支援の思い出話を回想していただきました。後半では、さらに踏み込んで、アディクションの本質に迫るお話をご披露いただいております。どうぞお楽しみください。

「物語を生きる」生き物

（アディクトの体験談は底抜けに面白く、本人たちの回復のためにも非常に効果がある、というお話を伺ったあとで）

富永 それから、齋藤先生にお聞きしたいんですけども……、信田さよ子さんと上岡陽江さんの対談の中で出てきたことなんですけど、女性の性的トラウマの話になると、トラウマの再体験につながるようなシェアリング（1）をする女性も出てくる、ということですが、

齋藤 そんなのは……「再体験」なんて言っているようじゃ、ダメでしょう？ それは、爆笑とユーモアのうちに、「そういうこともあったわね」と、「いつか笑える日も来るわ」と、そういう話にならないと、しょうがないんだ。

近藤 えっへっへ……

ちえぞう はあ……

齋藤 「あたしゃ、あのバカ男にこうされた。私はあのとき幼かったから、くっついて行っちゃった」とかね。「それが半年後にまた、繰り返されて……その半年後にまた起こりました」という（笑）

一同（笑、ちえぞうは苦笑）

齋藤 「それから私はソープランドに行きまして……わっはっはっは！」という風にやらないと（笑）

ちえぞう 痛い……痛いんだけど……（笑）

齋藤 そのぐらい、豪傑やってほしいよねえ（笑）。「身体が汚れた」だの何だの言っても汚れるなんて、心以外にあるわけでもなし。「自己歴史の中の汚点だ」なんて考えているとしたら、それはとんでもない間違いだ。

ちえぞう あの、わたし……「この相手に」とか、「この場でそういう、性にまつわる問題のことをしゃべって、自分にとって安全かどうか」という判断が、できないんですよ。だから平気でしゃべっちゃうし、それが性的な問題の種にもなるし。

富永 僕たち薬物依存の自助グループの男って、ピギナーのうちは結構、女性のセックスの話にとらわれますよね。（2）「すぐに具合悪くなる」というのが多いですよ。

近藤 えっへっへっへ……

富永 あれは、男の弱さなんですかね？

近藤 いや、マジメなんだよ、やっぱり。

富永 だからその点、齋藤先生のクリニックの中では自然に話し合われていることが、自助グループで話されると妙な吸引力を持ってしまったり。そういう現象は、あるような気がします。

齋藤 やっぱり、女性クローズド（3）でしゃべったほうがいいのか、男がいるときでも話したほうがいいのか、っていうのは、考える必要があるだろうね。だけど、さっきあなたが言っていた、「私はそのへんの距離感がわからない」というのはさ、それがあなたの、現時点での特徴、個性でさ。いいじゃない、それで。

ちえぞう いいんですか？



齋藤 うん。実際の再被害体験……「被害の再現」（4）から頑強に自分を保護できれば、いい。そこさえきちっと守ればさ、この体験が「話していい話か、いけない話か」なんて……政治家じゃあるまいし。自分のかけがえのない体験を……「しゃべっちゃいけないものだ」なんてことしてたら、自分が弱くなっちゃうじゃない？ さっきも言ったように、私は人に愛されている、「少なくとも、かあちゃんは可愛いと言った」みたいな感覚を、自分の生きる信念に据えていれば、そういうこと（被害の再体験）は起きないよ。

ちえぞう はあ……

富永 それは、色々な体験で傷ついて萎縮してきてしまった……もしくは発達しきれなかった自我を、話し続けることによって強化していく、ということでもあるわけですか？

齋藤 とうかかね、人間が生きる、っていうことは……物語を生きることなんです。行為、体験を物語化しないことには、自己の中におさまらないんです。だからまとまっていない、散乱した行為っていうのは、自分の中で非常に変な感じがする。その感じ、そこで起きている病理現象のことを「解離」というわけですよ。普通は解離なんてことをしなくても、人格に統合できるような経験をしているわけだから。

富永 はい。

齋藤 でもそのとき、語れないようなこと、ちょっと人に隠さなきゃいけないようなことがあったとしても、人間でおかしなもので……そういうことこそ、かえって笑いの中に発散昇華したり、作品に昇華したり、なんかこう……別な形で、表現したいものなんですよ。

富永 なるほど……

齋藤 で……あたしは、女の人の性に関連した被害体験みたいなものを、過度にまつりあげたり、逆に汚物のように隠したりするのは、両方イヤだね。あれだって、男の武勇伝みたいなものと同じ……あるいは、金儲け話と大して変わらないのに、て思うね。

近藤 「千人斬り」とか、よくいるわな。

ちえぞう はあ……なるほど……

齋藤 そう、男の話は「千人斬り」って自慢話になるのにさ、どうして女だと、同じ話が被害の話にならなきゃいけないの？ ヘンな話だよな。「あれは、暴力を使ったのは最低で許せないが、けっこう良かった」とか（笑）。「あの男は、善人ヅラしているくせに、全然ダメだ」とか（笑）。いいじゃない、それで。もっと、能動的な性として振る舞ったほうがいいと思うんだ。

近藤 えっへっへっへ……

富永 なるほどなあ.....

回復モデルを演じるな

富永 ダルクもそうですが、NAって、回復モデルがありますよね。モデルの模倣をすることで回復していく、みたいな。先生のクリニックの女性患者さんの場合、モデル、っていうのはやはりあるんですか？

齋藤 自分の回復目標になるような具体像ってこと？

富永 はい。

齋藤 それはあるんじゃないの、やっぱり。クライアントたちは、それぞれに、モデルみたいなものを作っているみたいね。.....ただ、見てると、そこにとんでもないミスマッチがあるよね。うちのクライアントだとさ、セラピストのさんだとかさ(笑)

一同 (笑)

齋藤 セラピストなんてのが「女性の回復モデル」なんぞになるわけがないや(笑)。人の心の、なんていうのかなあ.....恥や罪悪感を、対象にして、そこを乗っ取るうというわけさ.....

近藤 えっへっへっへ....

齋藤 とんでもない職業でしょ(笑)。まあ、精神科医もそうかも知れんが(笑)

齋藤 あとは.....たとえばNABAやAKKの古いメンバーだとか。それから、原宿経由の人は..... とか、 といったカウンセラーを、そんなふうに考えてみたいね(笑)。

一同 (苦笑)

齋藤 むしろ問題なのはね、そういう、フォロワーがいっぱいいるような立場になった人の方だね。最初のうちは気づいてないだろうけど、うーん.....だんだん、意識するようになるんだろうね。危険なのは、気づいてから以後、回復モデルを演じるようになったら危険だよ、神様になっちゃうでしょ。

ちえぞう ああ...

齋藤 私も気をつけなきゃいけないんだ。一番簡単に、しかも、やっておいたほうがいいことは.....ありのまま、というかさ。要するに生理的存在としての自分のことを隠さないことだよ。卑近なことでは、げっつ、おならの類いね。遠慮しない。

一同 (笑)

齋藤 私だったら欠点としてのタバコ。だってこれ、私のアディクションだからね。「やめられないんだ」ってことはもう、オープンにしてるし。

一同 (笑)

齋藤 やっぱりどこかで、向こう側の、神格化しようとする動きを破壊するよう心がけているよね、いつも。

富永 治療者として正直にクライアントに向かい合う、という.....？

齋藤 正直、というよりもねえ.....わざと、そういうのを過度にやっとなないかね、まずいよ。「なんだよ、ただのオヤジじゃん」っていうのを、いつもね、見せておかない(笑)

久里浜が過ちのはじまりだった.....？

富永 この世界では、「薬物依存者である当事者性」っていうのは、常に、オープンにするものですが.....(笑って)僕、一度、先生にお聞きしたかったですけど、齋藤先生の当事者性って、何なんですか？

齋藤 何なんだろうねえ(笑).....ヘーゼルデンとか、ジョンソン・エスティートとか、海外の薬物依存症治療施設に研修に行くと、大概、リカバード(回復者)がスタッフをやっているじゃない？ だからさ、必ず聞かれるんだよね。あなたは何のアディクトですか。私だって、「なんでこんなことやってんのかな」って思ったよ、本当に(笑)

富永 (笑)

齋藤 本当に、当事者性って薄いと思うんだよな.....(笑)。ただ、うちのオヤジが死ぬ前にねえ、いい年こいて、ウイスキーをビールで割っているのを見たとき、「こいつはヤバいな」って思った(笑)。私はその頃すでに久里浜に勤めていたからね。

一同 (笑)

齋藤 それでね、やっぱり.....久里浜病院(5)ですね。あそこに行っちゃったのが、すべての過ちのはじまりだった。

一同 (笑)

齋藤 国立病院で当時、給料がものすごく安かったんだ。だから同級生は誰も行かなかった。久里浜のなだいなださんが、国費のフランス政府留学試験を受けてた人で、奥さんがフランス人と聞いていた。私はフランスに行こうと思っていたわけ。そういう下心があって久里浜を選んだわけよ。

富永 はい。

齋藤 そしたらみんな、「なんであんなところ行くの」とか言ってね。「診療ができないじゃない、アタマ悪くなるからやめなよ」なんて言われたんだ。「あそこはね、診療の自由を奪われる」って、患者が自分でアル中って言ってるんだから(笑)

近藤 (大笑い)

齋藤 で、久里浜に行ったらね。なださんはいなくて、奥さんももちろん、いなくて。でもそのかわり.....なださんの抜けたあとのアルコール病棟をやったら、面白かったんだ。

富永 はい。

齋藤 当時20代後半でしょ？ 相手は軍隊帰りの.....当時まだ軍隊帰りだったのが、いたからねえ。あたしなんか近藤さんにシメられた「若い医者」みたいなもんでね。だからさ、言いたいことを言っていたよ。けっこう面白かったねえ。.....『冒険ダン吉』って知ってる？ マンガの。あの世界だね(笑)。アル中ってのは土人さ(笑)

一同 (爆笑)

齋藤 こっちゃん様でさ(笑)。仕切っているわけよ(笑)「けっこうコレ、合ってるな」と思ってね。

一同 (爆笑)

齋藤 何しろ、アディクションというコンセプトが未整備なの。それでみんな、毒に中(あた)ったって.....中毒だっていうんだよな.....

近藤 えっへっへ....

齋藤 「違うだろ、コレ」って.....こいつら、毒なんか中ってねえよって.....ありやあ心根が、おかしいな、とか思ってさ(笑)。

一同 (笑)

齋藤 つまりね、「嗜癖的人格」というのは何なんだ、っていうのが、私ね、生涯のテーマなんです。

富永 なるほど.....

齋藤 久里浜1年くらいでフランス行ったら違ってたんだろけれど。久里浜に3年8ヶ月いちゃって、あたしにもすっかり「毒が回って」からフランスへ行ったから、もう.....うつ病を診ても、総合失調症を診ても、ドラッグ・ディペンデンシー(薬物依存)とかアルコールリズム(アルコール依存)とどう関わるか、っていう目で見てしまうわけよ。それで.....そんな文献ばかり漁っていた。

富永 ふうん.....

齋藤 フランスっていうのは、モノマニー(偏執狂)の研究が盛んだったんですよ。昔から。小説『ハンニバル』のハンニバル・レクター博士みたいな知能の高い性格異常者.....あれは「変質者=デジェネレ」って言って、元々フランス精神医学の中の概念なんですよ。ヨーロッパの神学的世界観では、人間っていうのは神からだんだん時代が経るに従って、人間になる。それから

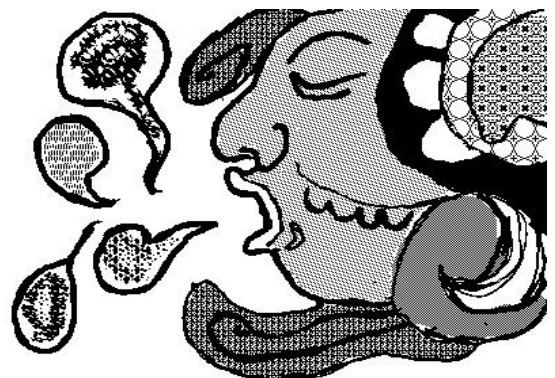


Illustration : PUSI

だんだん悪魔になる。悪魔になりかけの人を「デジェネレ=悪く変化した人」と呼んだ。

富永 はい。

齋藤 額がふくれてきてツノになって、シッポが出てきて、それで悪魔になっていく。指も6本になったり.....ハンニバル・レクターも6本指でしょ？あれは元々、フランス精神医学の中の概念なんですよ。イタリアのロンブローゾなんて人が「骨相学」を作ったね。顔を計測して「犯罪者には特有の、ツノの芽みたいなものがある」、とかさ.....そういう精神医学が昔、あって。そういうのがまだね、多少、残っていて、私の興味はそこにあった。

富永 はあ.....

齋藤 そういう「変質者」、「デジェネレ」っていう言葉自体はもう、現在の精神医学にはないんだけど.....アメリカに行ってアンチ・ソーシャル・パーソナル・ディスオーダー(反社会的な人格障害)なんて診断名に変わったんだけどね。だけど私は、そういう古いヨーロッパ的な.....神学に基づくような精神医学に、凝っちゃったんだね。

富永 はい。

齋藤 これは面白い。みんな、「人間をどういう風に分類するか」とか「この人の運命は」って話なんだよ。それとアルコリズムは割と結びつくんだ。「これは昔だったら“変質者”だ」ってのがいるからね.....どっちかっていうとみんな、そういうの嫌いでしょ？ あたし、好きなよ。「猟奇犯」「殺人犯」なんて(笑).....フランスでオランダ女子を殺して食っちゃった人、いるじゃない？ ああいうの好きなよ、割と。

ちえぞう え？ ええっ？！

一同 (笑)

齋藤 あたしと一緒に東京都の研究室にいたNっていうのが、もっと好きでね。「カニバリズム」っていうって.....人肉嗜食の本ばっかり本棚に並んでいた(笑)。Nは松沢病院で、あの男の担当医だった。

近藤 N先生なんだ。

齋藤 松沢時代のね、あたしの部下だった。あたしが上司で(笑)。だけど.....あの人もフランス語のほうの人で。そういう人は割と人格障害みたいなのが好きな人が多いね。.....だけど、つくづく、ずっと.....やってきて思うことは、ドラッグ依存とかアルコリズムっていうのは、そういう問題とは無関係だね。逆の言い方をすれば、「薬物、アルコール依存症患者には、さまざまな人格障害者、および、非・人格障害者が含まれる」という平凡の上ない結論だね。

近藤 えっへっへっへ.....

齋藤 薬物依存症になるかどうか、っていうのは、素因よりむしろ状況だな。例えば「ベトナム戦役の際のアメリカ軍にいた」とかさ。こりゃもう、ほとんどドラッグをやっていたからね。それからクリントンとかね、「1960年代に西海岸で学生生活を送った」とか。今の連中、大統領になったりしてるとね。みんなクスリやってますよ。マリワナなんか、やって当たり前だ。

富永 でもそうやって使っていた人たちの中で、止まらなくなる人、っていうのは、その違いは？

齋藤 それはやっぱり、置かれた状況の問題でしょう。要因は複数だと思うね。じゃあ、遺伝、素因的なものが皆無かっていったら、そんなことはないで

しょう？

富永 はい。アルコール依存の血縁者に依存症者が出る確率の高さを、統計的に証明する研究結果が発表されたりしていますね。

齋藤 うん。それから、その素因のひとつに、染色体レベルの話としていま言われているのは.....遺伝的にとにかく好奇心が旺盛な人と、そうでない人がいる、と。ノベルティ・シーカー(6)っていうんだけど。「新奇性追求型」とそうじゃないのがいて、その人たちはアディクションになり易いんじゃないかと。でもこの話はいまだ結論が出ていないというのが実態です。

トラウマは実在する傷である

富永 さっきベトナム戦争の話が出たんですけど.....先生、「トラウマ」「心の傷」というものは、実在するものなんじゃないかと。

齋藤 トラウマは、単なるアナロジーじゃないですよ。.....それを証明するために今やっているのは、性的外傷体験のある人に絞って、片っ端から脳のMRIとスペクト(SPECT)の画像を撮ってるんだ。身体的虐待だと、頭殴られて脳に障害が残ってもおかしくないから、対象を性的虐待に絞ってね。そうしたら、外傷体験の重度毎に見事に違うんだ。

ちえぞう 重度ごとに？

齋藤 そう。重度1っていうのは、インターコース(挿入)されたとか、フェラチオを強いられられたとか。重度2だと、性器に指を入れられたとか。そういうのに分けてさ。

ちえぞう はい。

齋藤 すると、1度、2度の人はやっぱりね.....脳がへんだ。ひとりでいうと、全体に萎縮しちゃっているんだ。最初は、記憶を司る部位である海馬だけに損傷があると思っていたんだよ。そしたら、他のところもみんな小さい。海馬の萎縮よりも、脳の皮質の萎縮のほうが強いぐらいだね。

ちえぞう ふうん.....

齋藤 いま、それはMRIの2次元画像で充分、撮れるんだけど、だいたい海馬ははっきり写ってなくてね。私も練習して見えるようになったけれど、そうじゃないそこの一般の人がちょっと見て「こりゃへんだ」といえるような、3次元画像におきかえられないかなと思って。いま、その相談をしているところなんだ。被害者の脳は明らかに違うんだよ。同じ25歳の脳で被害を受けていない人と比較すると、被害者の場合は「これって老人の脳じゃないか」というくらい萎縮している。

富永 それは、性的被害だけに限らず、やっぱり、親からの虐待なんかでも？

齋藤 あると思う。ただね、今のところ、対象を性的虐待に絞ってやっているんだ。この方法では身体的虐待までは今は手が回らない。

富永 なるほど。

齋藤 ただ、もうひとつのやり方としてね、さっきの話の「汚れた.....」みたいな、思い出すだけでストレスになるような外傷体験を思い出させること(エクスポージャー、「体験の暴露」)をやらせて、その時に、唾液なり血液なりからストレスマーカーを作っておいて、その動きをみる、というのがあるんだ。例えばストレスマーカーとして、アドレナリンと共放出される物質の「クロモグラニンA」っていうの動きを追ってみる。それはアドレナリンが出るときだから、普通の人なら、ストレスがかかれば濃度が高くなって、それからまた、安静時に下がる.....山型になるはずなんだ。そのとき何が起きているのかというと、嫌な思い出にひたれ、って、ひたすわけだ。そうしたら本来の生物だったら、嫌な思い出から逃げようとしてアドレナリンが分泌されるでしょ。

富永 はい。

齋藤 それがね、外傷体験にさらされていた人は、高くはならずにもむしろ下がっちゃって、安静時に少し戻る、という逆三角になるみたい。

ちえぞう それは.....どういう状態なんですか？

齋藤 無感覚になっちゃうんだよね。逃避と闘争のホルモンであるアドレナリンが出ない、ということは「どうにでもしてくれ」ということですよ。

ちえぞう なるほど.....

齋藤 つまり.....外傷にさらされていた人には、バイオロジカルに説明できる2つの問題があるんじゃないの。ひとつは脳そのものの萎縮。もうひとつは今話したように、記憶そのものがストレスになるから、そのたびにある種の脳内ホルモンが防衛機制に走る。その物質、たとえば -エンドルフィンなり、コーチゾンなりが、脳細胞を破壊するというわけだ。つまりトラウマは単なるファンタジーではない。破壊力を持ったリアリティですよ。

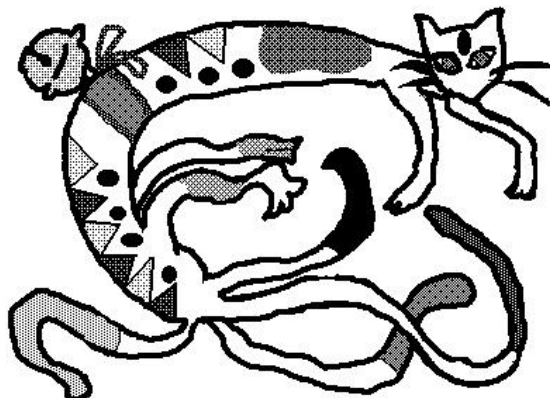


Illustration : PUSI



Illustration : haruna

戦争神経症からPTSDへ

富永 ああ……ベトナム戦争の、米軍兵士のトラウマは、アメリカ政府が作り出した、移民政策的な……彼らを黙らせるための……「それは政治問題じゃないんだよ、トラウマなんだよ、なんて言うために作り出された概念なんだ、という見方があるそうです。結局、ベトナム戦争では、ヒスパニックや黒人たちが、ベトナムから帰ってくれば市民権が得られる、という理由のもとで戦場に行き、それで悲惨な思いをして帰ってきたら、アングロサクソンは富裕な生活をしている。じゃあ自分たちの経験は……あの悲惨な経験はいったい何だったんだ。そこから始めて、アルコール依存だとか、不安全感だとかに陥っていった。なのにアメリカ政府は「それは戦争のトラウマだ」という言い方をしたんだ、と。

斎藤 まあ……そういうのもたぶん、あるかもしれないね。それもひとつの側面でしょ。でも現に、PTSDで国防総省から保護費受けている人は、コーカシアンもいるし、ネイティブ・アメリカンもいるし、アフリカン・アメリカンもいる。

富永 はい。

斎藤 ひとついえることはさ、あの運動……アウトリーチ(outreach)・ムーブメントを担った人たちの多くは、AAを経過した人たちだと思うんだよ。ネイビーやアーミーに、必ずAAやNAがあるわけだから。その人たちが従軍経験による心的外傷体験の後遺症について、rapping(自由にしゃべること)……しゃべるといってのははじめたんだ。ラップ・グループっていったんだけだね。そこからアウトリーチ・センターができるわけですよ。

富永 アウトリーチ・センター……

斎藤 「助け合い」センターというのかな。……で、兵役に行った人たちは、奨学金をもらえるから、大学で心理勉強して、修士出て。そのあと、アウトリーチ・センターという国防省の外郭団体のカウンセラーになった、と。……あたしがどうしてそれを知っているかっていうと、阪神大震災のときにその、軍人上がりのカウンセラーがいっぱい来たじゃない。

富永 ああ……

斎藤 彼らの一部が帰国する前にまだ研究所(東京都精神医学総合研究所)にいた、私のところに寄ったんです。それがみんな従軍経験者で、「どうして？」って聞いたら、「もともとは、ベトナム戦役から始まった」と言っていた。

富永 ふうん……

斎藤 アフリカンもいたのかもしれないけど、あたしがそのとき会ったのはほとんどが、コーカシアンだった。で、絶対これAAの影響だと思っているんだけど。

富永 はい……

斎藤 あたしは、今のPTSD概念を作ったのは学者たちよりも、ラップ・グループに集まった元・兵士たちだと考えてる。……その人たちは、自分たちがおかしいんじゃないかと、「これは傷病だ」と言っていたよ。「軍隊行かなきゃこんなことにはならなかった」と。

富永 ああ……

斎藤 で、彼らは「精神科医のところになんて行くのは嫌だ」といってね……彼らはこういう人々を招いたのよ(書架から一冊の本を取り出して示す)。これはねえ……『Death in life』って本だけど、リフトンって精神科医のチームがね、あの……ヒロシマの被災者の調査をやった。この人々をはじめとする精神科医たちのグループに、自分たち(ベトナム戦争の元兵士たち)の体験を分析させて、それがPTSD概念の元になった。

一同 ふうん……

斎藤 我々は、ヒロシマの体験を持っているんだから、被害者たちがどうい

う……トラウマの後遺症をもったかを、日本の精神科医たちがきちんと追っておくべきだったと思うんだけど、日本の精神科医にはできなかった。まあ情報が隠されてたせいもあるんだけど。あの時期さ、我々の先輩たちも……カボチャ食って、イモ食って、だから……とてもできなかったのよ(笑)

近藤 えっへっへっへ……

斎藤 その……ラップ・グループを始めた連中のモデルになったのがAAだ、っていうのが、私の考えだ。「ノンプロフェッショナルの人たちが話す」という基本的な姿勢、というのがね。これはミッシング・リンクを埋める私の推測です。だってそうじゃない。なんで、復員軍人たちがそんな……共通の話題について語り合う、みたいなグループを……そういう発想持つわけ？

富永 ああ……なるほど

一同 ふうん……

斎藤 そのとき女性たちももう、コンシャスネス・レイジング・グループ、CRグループっていう……女性たちの、フェミニズムの元になったグループを始めでてね。でも、「男たちが会っておしゃべりする」ってのは、ほんとと珍しい。AAとNAくらいでしょ。たぶん軍隊でそれを覚えてきたんだと思う。

富永 なるほど。他にないですよ。

斎藤 そういう話は、書いてないんだよ、向こうの文献にも……彼らアメリカ人たちに何度も聞いたんだけどね。「たぶんそうだと思う、みたいな言い方しか返ってこない。

富永 ああ……

斎藤 で、ラップ・グループの運動が元になってPTSD概念ができていったんだが……でもPTSD概念そのものは、第一次世界大戦後にね、1940年代には確立していた。「戦争神経症」という名前で。

富永 はい……

斎藤 もっと前は同じことが「ヒステリー」って呼ばれてた。ヒステリーは女に多い病気だから、詐病扱いされて見向きもされなかった。なのにそれが「兵士の病気だ」ってことで再び登場したのが、ベトナム戦争後なんですよ。そういう、太い流れでさ、「人間が災害に遭えば、身体に現れない“傷”というはずと継続するんだ」という概念は、非常に大事な、基幹概念のひとつなんだけれど、それをね、切り捨てようという動きがしょっちゅう現れては消えていく。さっきの「PTSDは政治的陰謀ででっちあげられたんだ」という説もそのひとつ。こういう現象は実に面白いと思うね。

富永 なるほど。

斎藤 あたしも、いま最後の仕事って思ってやっているのは、その……心理学的なものだといわれている問題が、どういふ身体的媒介で……いったい何が起きているのかを、とば口だけでも見つけていきたい。だってそうじゃない、心理現象ってみんな脳の中では、物質の変化によって起こっているわけでしょ。脳内のホルモンの動きだとか、電気信号だとかで表現されているわけだから。

クロス・アディクトの回復とは？

ちえぞう あの……全然、関係ないかも知れないんだけど、さっきからずっと、すごく聞きたいことがあるんですが……近藤さんもいらっしやるんで、あの……さっき、クスリを使ってる、「やめられた人」と「やめらんなくてNAにたど

斎藤 学(さいとう・さとる)

1941年、東京生まれ。
精神科医、医学博士。慶應義塾大学医学部卒。
国立療養所久里浜病院精神科医長、東京都精神医学総合研究所主任などを経て現在、家族機能研究所代表、さいとうクリニック院長、アライアント国際大学・臨床心理大学院教授。
著書に「家族の闇を探る」(小学館)「家族依存症」(誠信書房)ほか多数。



りついた人」って分け方を、したじゃないですか。それでいくと私は「やめられた人」に.....なるん.....ですよね？

齋藤 うん。

ちえぞう で、私は.....クスリやめてることにストレスがないんですね。それは何故か、っていうと、私にとって、「依存対象はなんでもいい」んですよ。クスリじゃなくても酒でいいし、酒もダメっていわれたらオトコでいいし、オトコもダメっていわれたらアレでいいし.....って。もう、なんだったっていいんですよ。で、そういう人は、どうしたらいい、っていうか.....

齋藤・近藤 ふいふふ.....

ちえぞう だから、NAにつながったから、どうって.....(苦笑)、何も、治ってないんですよ。何も、ないんですよ。で、仮に、そういう「モンダイかな？」っていうことを、全部やめてみたとするじゃないですか。過食とか.....なんだかんだ。

齋藤・近藤 うん

ちえぞう でさ、全部やめてみたらやめてみただ、ほら.....なんだっけ、「飲まない酔っ払い」とか、「ホワイトナックルな」とか(笑)(7)

一同 ふいふふ.....

ちえぞう言われるんですよ、どうせ(笑)。「ワーカホリック」とかね。じゃあさ、私の回復っていったい、どこにあんの？ っていうと、とくにあの.....近藤さんにお聞きしてみたいと思っていて.....私の「病気」は何なんだろう。薬物依存の自助グループ行っていいんでしょうか？

近藤どこでもいいんじゃないの？(笑) どこにいても。

ちえぞう？

近藤 その、なんで、やめる必要.....あんのかな？ 依存を切り返していく、っていうのは.....何か問題があるわけ？

ちえぞう うーん.....

近藤 大体、僕たちは、何か問題が出来て、じゃあやめようか、って話になるわけだな。つまり、動機があって.....でも、なんかこう.....あなたは、自分である程度のところまで、セーブできてんじゃない、みんな、コントロールできてる。

ちえぞう コントロール.....うーん.....なんかですね、「そろそろコレはコントロールできないな、ヤバいな」って思ったら、他のに乗り換えて、それもコントロールできないなって思ったら乗り換えて、ってのを.....延々、やってるんですよ。それって、コントロールできてるうちに入るんですか？

近藤 僕、それは、コントロールできてると思うよ。

ちえぞう そうですか.....うーん(考え込む)

齋藤 なんか、こう.....「プロセスを楽しめない」んじゃないの？ 何やるにしても、ゴールばっかり考えちゃって。

ちえぞう うーん.....？

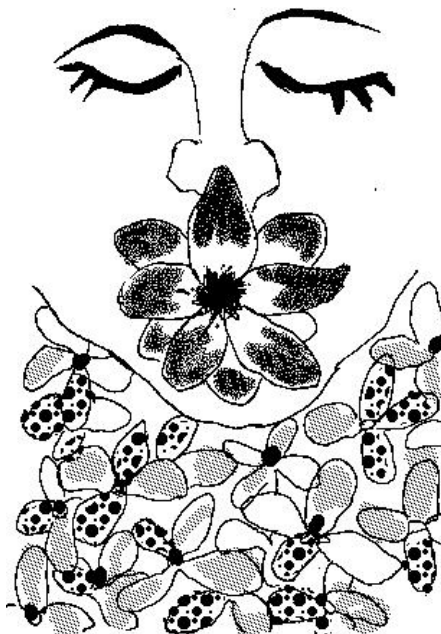


Illustration : PUSI

齋藤 ある人が花に水やるのも、その人が.....あることで悩んでたうちは、何やっても「こんなことやってる場合じゃない」とかね、思ってたんだって。でも、あることをしゃべっちゃってから急に、「花に水やりするのも、一生懸命やれるようになった」っていうんだよね。

ちえぞう ああ~あ.....そうなるんですかー。

齋藤 この「一瞬一瞬が重要になってくる」という経験なんじゃない？ 回復って。

ちえぞう はあ.....

齋藤 そうなる前はほら、コンちゃん(近藤)にしてもこの人(富永)にしても、「こんなことやってる場合じゃない！」ってのは多

いんだよね(笑)。そうすると、ちょっと時間を捻出しては、「(クスリを)やるう」ってことになる(笑)

一同 (笑)

齋藤 ふいふふふ.....たぶん、だから、あなたの場合も.....どこかにまだ、なんか片付いてない問題があるのよ。「こんなことやってる場合じゃない」っていうのが、まだあってね。そこが、スプーンと抜けちまうと、「今、現在」に集中できるようになるんじゃないの？

ちえぞう はあ.....(また考え込む)

近藤 僕がスポンサー(8)にね、よく言われてたのは.....「あなたは、第3ステップ(9)がとてよくできてる人だ、ととても、お任せができる人だ、と思ってたんだけど.....どうもそうじゃなくてね、ただ先のことを考える能力がないだけだ」って(笑).....気がついた、って言われたんだ。

ちえぞう はあ.....？

近藤 だから.....あなたには僕なんかより、まだ先のことを考える能力があるんですよ。えっへへ.....

ちえぞう ええっ.....えへへ.....(苦笑)

一同 (笑)

富永 そうですね.....「どうにもならなくなった」っていう.....とこまで、行ってない.....

齋藤・近藤 ふいふふふ.....

ちえぞう いや、だから、そこまで行くまでに逃げちゃう.....

近藤 行く必要はないわけだな。逃げられるんだから。

富永 うん...うまく.....切り替えができてりゃ、いいじゃない。

ちえぞう 全然、うまく行ってないから.....いまだに生活保護なんだと思うんだけど(苦笑).....

近藤 いや、生活保護、ってのは、それはまた別だよ。

ちえぞう 別ですか？

近藤 それは、病気に拘束されているだけなんだから(笑)。えっへっへへ.....！

一同 (笑、ちえぞうは苦笑)

齋藤 やっぱり.....あれなんじゃないかな、「うわのそら」、なんじゃないかな。

ちえぞう うわのそら.....？

齋藤 うん.....あなたには何か、「うわのそら」を作っている、コンフリクト(葛藤)なり何なりがあるのよ。たぶん.....ほとんどもう、のどの先まで出てんだよね。.....ある程度、わかってんだろうけども。

ちえぞう ああ.....あの、「うわのそら」のお話でなんか、思い出したんですけども、「治らないじゃん！」「治してくれるんじゃないのかよ！」ってムチャクチャ腹を立てて、「回復だの何だの、うるせえ！」って(笑)、通院しなくなって、NAとか自助グループも、まる1年、切って.....しゃかりきに働いてたんですよ。で、働いてみてやっぱり、「ああ、ダメだこりゃ」と思って、自助グループに戻ってきたんですね。で、今度は、しゃかりきにミーティング行ってたんですよ(笑)。で.....そしたらなんか、なんだろ、「ああ、このまま、こうやってミーティング行ったら、あたし、治っちゃう？！」って思ったんですよ(笑)

一同 (笑)

ちえぞう (苦笑しつつ)過食も止まってるし、おそらくもう、処方薬ももう使わないだろうし。で、酒も止まってたし.....で、「な、治っちゃうわけにはいかない！！」って(笑)

齋藤 うん。

ちえぞう 気がついたら、性的逸脱というか.....援助交際みたいなことをしてしまっていたり。

近藤 ああ.....

ちえぞう (苦笑)

齋藤 まだ、なんか問題作ってない心配なんだよね。問題のあるうちはまだマシでさ、「問題がなくなる心配」てのが一番、深刻なんだ。

ちえぞう ああ.....

齋藤 コ・ディペンデンス(共依存)(10)てのは、私の解釈では、常に周囲に問題をつくって、忙しくてないとしようがない、ってのが、最大の特徴だからね。そこがやっぱり.....あなたの人生を「うわのそら」にしてんだと思うよ。



Illustration : haruna

ちえぞう はあ……

齋藤 「安定して、平和で、秩序があって」ってのは、本来、いいことなんだよ(笑)。ふっふっふっふ……

一同 (笑、ちえぞうは苦笑)

齋藤 桃源郷でさ、寝てもいいんだよ。「ベッドの上で、眠るともなく、眠らぬともなく、うつらうつら」……て(笑)。これが、我々が望むところで、それに向かって歩いてんだからね。それができないから、いつも何か問題おこしてんだ。

富永 なんて、できないんですかね。……僕もできないんですよ。

齋藤 うん……やっぱり、もう少しシとんないと、ダメなのかなぁ？ 桃源郷っていいじゃない。猫を見てごらんよ。猫だってできることが……

富永・ちえぞう (爆笑)

富永 先生がおっしゃっていた、今の時代の「飛んだり跳ねたり」(11)……すごく自分に当たっていて、なんでできないのか、わからないんです。

齋藤 うん……

富永 いろいろ考えちゃうんですけど、こう……もう……どんどん今、社会のシステムが息苦しくなっていくじゃないですか。

齋藤 こんなことしてちゃいけない、と思っちゃうんでしょね、寝てると。

ちえぞう あはははは……

なんだ、先生もジャンキーじゃん！

富永 (笑って)そうそう。僕も、あの……軽い「摂食」(摂食障害)があるんですよ。前は、もっとひどかったんですけど。僕の「摂食」が起きるのは、夜中なんです。いちばんよく眠れているときにフッと目が覚めて、夢遊病のように起きだして、やり始めちゃうんですね。気がつくと、メチャクチャ食べ吐きしたあと、っていう状態なんです。たぶん落ち着いて寝ていると、何かが出てくる。

齋藤 ふうん……なるほど。

富永 それは、何が出てくるんですか？

齋藤 (しばらく沈黙)

近藤 富永君。……それはな。

富永 はい。

近藤 キツネ憑きた。

一同 (大爆笑)

富永 ……キツネですか、やっぱり！

ちえぞう そっかぁ！(バカ受け)、キツネが憑いたのかぁ！

近藤 えっへっへっへ……

富永 なんか、夢遊病状態なんです、僕の「摂食」は。

齋藤 あなたたちみたいなのは、基本的に、ドーパミンなんだよね。ワーカホリック的、といったらいいかな。ハードタイムが、ハードタイムを準備する、みたいな。一方向的にさ、ハード、ハード、ハードで行って……これ何だ、って言ったら、シャブ中ですよ。

富永 あはははは……

齋藤 外部から取り入れるシャブは止まったかもしれないけれど、アタマの中のドーパミンはシャブとほとんど同じものでしょう？ これは、めぐってんだよ。かろうじて睡眠はとっていてもさ。

富永 はい……

齋藤 夜中に食わせる、というのは、ドーパミンだと思うよ。覚醒するとドーパミンがパーっと出てきてね……なぜ食うかという、胃を膨らますと、ドーパミンの過活動が下がるもん。食べる、咀嚼して……そのかわり、過食しないとダメよね。胃の消化のほうに移ると、アドレナリンの方じゃなくて……高校の生物学でやったでしょ、副交感神経優位になる。アセチルコリン優位になる……そうすると今度、セロトニンが動き出すわけ(12)。深い睡眠ってのはセロトニン系ですよ。あれが桃源郷状態に近い。過食することでそれが急に来るから、食べ散らしのまま寝ちゃうわけだよ。昨日、まったく君と同じことをやったんだよ。

富永 はあ……？

一同 (笑)

齋藤 寝られなくなっちゃった。原稿書いて……12時30分から、一杯やってから原稿書き始めたら、寝られなくなっちゃってさ。翌朝8時から会議があるんで、こりゃヤバい、と思ってサイレース(眠剤)を飲んだ。半錠、つまり1mgね。それで、寝付くまで小説を読み始めたんだよ。それが2時になっても寝られなくてさ、小説が結構いいところにさしかかってさ。中国のチャンバラ小説。

一同 (笑)

齋藤 この際、ちゃんと起きて読もう、でも寝なきゃヤバいなあ、と思ったりしているうちに……なんか、妙に腹が減る。

一同 (爆笑)

齋藤 どんぶり飯を二杯くらい、食っちゃった(笑)。その途中で、ものすごい眠気で……足がフラつくような。普段、感じたことがないような。……あたしは、睡眠薬は適宜に使っているから、よく知っているけれど、何かやりながらの眠気、っていうのは、初めてだね。原稿書くときなんかでも、ちょっと使ってから書いて、ちょうどいいときに寝ちゃうような芸当、できるのよ。新聞のコラムなんか大体それで書いているんだ。なのに昨日はヘンだったね。……だから、あなたの言っているのよくわかるよ。

富永 はあ……

齋藤 自分でやりながら、何が起きているのか、って考えていたのよ。これは……原稿を、明るい灯の下で書いているうちにドーパミンが出てきて……

一同 (笑)

齋藤 これはやっぱり、アセチルコリン優位の状態を作らないとマズいと思ってる(笑)、クロニジンというアドレナリン遮断剤を飲んでみたけれど効かないので、眠剤を飲んだわけ。

一同 (笑)

齋藤 それでもやっぱり、眠れないので過食で鎮静しようとしたら、これが良く効いたというわけだ。

近藤 ジャンキーじゃないですか、先生。立派な！

齋藤 わっはっはっはっは！

一同 (爆笑)

齋藤 今日は朝方、胃がもたれて……で、何だろうこりゃ、と思ってね。酒のせいかなぁと思ったが、酒じゃないんだよね、真夜中に食ったメシのせいなんだ。「これをやってるんだ、摂食障害のお嬢ちゃんたちは！」って思ったよ(笑)

富永 あはははは！

ちえぞう 私がやっていたこと、まったく同じです、先生！……それであ

近藤恒夫(こんどう・つねお)

民間の薬物依存リハビリセンター「ダルク(Drug Addiction Rehabilitation Center)」創設者。自らの薬物依存体験を生かしてアディクション問題の啓蒙活動に奔走している。2001年吉川英治文化賞、1995年東京弁護士会人権賞を受賞。



たしミーティング行ってるのにー.....どういこと?! (笑)
 齋藤 君たちは、だけどさあ.....ちょっとでも文章書けば金になるじゃない。それやらずに.....なんで興奮すんの? (笑)。そこが問題なんだよ!
 ふうふうふう.....
 富永 うーん.....なんで落ち着けないんだろうなあ.....
 ちえぞう ふうふうふう.....
 近藤 拘禁病じゃないの?
 富永 拘禁ストレスですかね、いまだに?
 近藤 そうだよ。
 富永 4年間入ると、やっぱりズスタになるのかな。
 近藤 それはやっぱり、ダメージでかいよ。PTSDだよ(笑)
 富永 拘禁ストレスって、そんなに長引くものですか?
 齋藤 長引くでしょうねえ。
 富永 そうかあ.....
 齋藤 うーん、たぶん.....自分でどれが、それだか、わからなくなっちゃってるかも知れないねえ.....
 富永 そうですね.....

当事者活動に返す

富永 最後に近藤さん、クリニック構想についてちょっと、お話していいですか。
 近藤 ああ、どうぞ。
 富永 今度、近藤さんがクリニックをつくる計画を立てているんですよ。来年1月に開院予定だそうです。
 齋藤 ほう。
 近藤 家賃を払えなくなっちゃってね(笑)。施設の家賃が高い、払えない。それから.....入寮者に生活保護の人たちが多くて、長期化になっちゃっているんだね、みんな。
 齋藤 いいねえ.....うちのドラッグ、みんな送り込もうか? (笑)
 ちえぞう あははは.....
 近藤 先生、メインの医者は内科医でもいいんでしょう?
 齋藤 いいんですよ。
 近藤 ただその先生が.....おじいちゃんなんだけれど。家族の薬物問題でやはり、長年苦しんでこられた方だね。
 齋藤 ふうん。
 近藤 で、もう、前々から言っているんだけど、「先生、うちの若い子たちの面倒、見てくれませんか」って。そうしたら「じゃ、手伝わせてくれますか」って話になって。リハビリが専門で漢方にも詳しい、いいドクターなんですけれど.....時々、眠っちゃうお医者さんなんです。話ししてうちに(笑)。
 一同 (爆笑)
 齋藤 場所はどこ?
 近藤 上野でやろうかと思って。アパリ東京事務所の隣でね。デイケアをやりたいと思っているんですよ。リカバード(回復者)をスタッフにして。
 齋藤 デイケアやるとなると.....ちょっとした入院施設みたいに、人を沢山雇わなければならないから。
 近藤 そうみたいです
 富永 ですね。
 齋藤 上野か.....面倒くさいから、あたしもこっち閉めて、そこ、やろうかな(笑)。
 一同 (笑)
 近藤 (笑って)また、いろいろと教えてください。
 齋藤 うん.....デイケアは一度開け

ちゃうと、なかなか閉じられないからね。クリニックで最初やってみて、しばらく出だしを見てから、デイケア申請したほうがいいのかもね。いきなりデイケアという、かなり人を雇用しなきゃいけないから。
 近藤 なるほど.....そういう方法もあるんだ。
 富永 一日、患者20人.....?
 近藤 20人くらいでしょう? ほとんど重複障害じゃないかな。
 富永 ダルクの回復者スタッフを、デイケアのスタッフにしちゃおう、という.....
 齋藤 うん。それは構わないと思うんだけども。
 近藤 ほかに資格を持っている人が必要だからね。
 齋藤 どうしても必要なのは、医者、ナース、PSWじゃないかな。PSWだったらいろんな職種、いろんなバックグラウンドがあっていいんだけどね。問題は看護婦だね。確か.....20名か30名くらいまでは、1人でいいと思うんだよ。
 近藤 で.....そうだ。1.5人くらいで計算したものの。金入ってくるまでは大変だから、半年間はまた、スタッフみんな飲まず・食わずだ(笑)。
 富永 またですか? (笑)
 近藤 面白いじゃん(笑)
 富永 はあ.....(ため息)
 近藤 あなたは当事者なんだから。当事者が.....やればいいんですよ、デイケアの部分は。
 富永 当事者活動.....
 近藤 そう。だいたい、アメリカなんかそうだよ。
 富永 先生もやはり、JUSTとかAKK、NABA(13).....当事者活動のバックアップを長年、してきてくださっているわけですよね。
 齋藤 うん。
 富永 いま、言われてますね。当事者活動が力を持ってきた時代だと。力というか.....意味を。その意味って、先生はどのようにお考えですか?
 齋藤 薬物依存の領域っていうのは、専門家の絶対的な力っていうのは、ありえないわけじゃない? そういうところは当事者たちがどんどん変革していくこと.....そのほうが経済的だしね。それに、そういう問題は、専門家からしても面白くないんだよ。(笑)。だから、こちら側にしても余計、「そっちでやってよ」っていう話になってくる。元来が精神科医による精神療法が担当していたようなものは、当事者運動に任ず、というふうに。
 富永 はい.....
 齋藤 そこでむしろ医者は、バイオロジストとしての原点に戻ろう、と、神経症から何からみんなバイオロジーで.....分子生物学的に説明しよう、っていうふうになって来ているね。50年前よりずっと、薬物とか何だとか、そういうものに頼る方向に、治療の方向が昔返りしている。そういうのがこちらの本質的な仕事だ、という話になって。だんだん.....橋渡す人が減ってきている、という感じ。まあ、方向としては、かつて精神科医がやっていたような領域の多くは、サイコセラピストがやるようになる。サイコセラピストのセラピーにも保険がきく.....そんな方向になっていくのかな。そうすると、医者のほうは、余計他の科に流れて精神科医がいなくなるか、あるいは神経科学の領域に閉じこめるか、っていう話になってくるでしょうね。
 富永 専門家は原点に戻り、精神療法は当事者に、ですか.....先生のお言葉.....「あなたたちにも、できることがあるよ」という励ましのお言葉にこれまで、僕たち当事者がどれだけ力づけられてきたか分かりません。先生、今後ともアパリやダルクを見守っててください。よろしく願います。
 齋藤 はい、はい(笑)。
 近藤 先生、今日は長い時間どうも、ありがとうございました。
 一同 ありがとうございます.....

注 釈

1. トラウマの再体験につながる..... 回復のためではなく自分を傷つけるために、まだ完全に癒えていない痛みや恥をさらけ出すようなシェアリングをすること。(3号、4号参照)
2. (セックスの話)にとられる 「なんであんな話を僕の前で彼女はしたんだろう.....」 「もしかしら僕に気があるのかな」「う.....彼女、おとなしげな雰囲気似合わず、陰

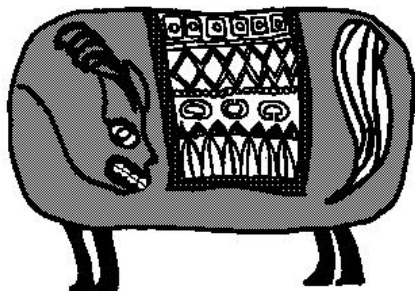


Illustration : PUSI

ではあんなことや、こんなことを……」こうした思考回路に陥るのはなぜか男のメンバーばかりのようである。

3. **女性クローズド** クローズド・ミーティングには、その本人だけしか参加できないという決まりがある。女性クローズドは女性のみが参加できる。

4. **被害の再現** 「トラウマの再演」。心的外傷体験を持つ人には、似た体験を繰り返してしまう傾向がある。母親のDV被害を目撃して育った娘が、DV男と恋愛関係に陥ったり、レイプ被害に遭った女性がまた被害に遭うような状況に身をおいてしまったり……似たような状況を繰り返すことで自己治療を試みているかのようだが、それでは傷は深まるばかりである。わっはっは……！ということになるのが回復への道。

5. **久里浜病院** 国立療養所久里浜病院。前号の注を参照。

6. **ノルベティ・シーカー、新奇性追求型** 遺伝的に「飽きっぽい」人(=新奇性追求型)とそうでない人がいる。「飽きっぽい」タイプの人は次々に新しい刺激を求めざるを得ず、アディクションにつながりやすいのかもしれない、という説。

7. **「飲まない酔っ払い」「ホワイトナックル・ソプラエティアー** AAの言葉で「ドライドラッカー=飲まない酔っ払い」。アルコールの摂取はやめても思考や行動、感情のパターンが飲んでいた頃と変わらない状態をいう。たいへんくるしい。「ホワイトナックル・ソプラエティアー」は創刊号掲載のロイ・アッセンハイマー氏の話を参照。体じゅうに力をいれて頑

張りながら「私、クスリやめてます！」とニコニコしている状態。

8. **スポンサー** 12ステッププログラムでは、スポンサーと呼ばれる人をもつことを勧めている。自分の回復に関してどんなことでも相談できる相談相手。

9. **第3ステップ** 12ステッププログラムのステップ3「われわれの意志と生命の方向を変え、自分で理解している神、ハイヤーパワーの配慮にゆだねる決心をした」。アディクトの生き方の根本である、あらゆることを自分の思い通りにしようとする(コントロール)やり方を手放す、重要なステップ。

10. **共依存** これもまたアディクションの一典型。他人の問題のケアに没頭することで、自分の低い自己評価、心の痛みといった自分の問題から目をそらし、覆い隠す。

11. **飛んだり跳ねたり** 第5号参照。最近の若い人には、クスリ使ってテンパって走り回ったり、食べたり吐いたり、手首を切ったり、なんと落ち着かない人の多いことでしょう。

12. **ドーパミン、セロトニン** 脳内ホルモン。交感神経系・アドレナリン優位の状態(覚醒、闘争)でドーパミンが、副交感神経系・アセチルコリン優位の状態(弛緩、休眠)ではセロトニンが分泌される。アディクトはこの脳内ホルモンの分泌バランスがぶっ壊れている。

13. **JUST、AKK、NABA** JUSTは日本トラウマ・サバイバーズ・ユニオン、AKKはアディクション問題を考える会、NABAは日本アレノキシア(拒食症)・プリミア(過食症)協会。

<司会>
ちえぞう

愛を求めて全国を漂流するクロス・アディクト。約半年の間、フェロシップ・ニュースの編集に参加していたが、自身の回復のために、再びミーティング放浪の旅に出るらしい。「会場で会ったらなかよくしてね」だってさ。

富永滋也(とみなが・しげや)

1968年生まれ。「最も回復しない回復者スタッフ」としてAPARI東京本部で相談業務を担当。フェロシップ・ニュース責任編集者。



「向精神薬に頼らない依存症治療を！」

アパリクリニック 開設準備中！

近藤恒夫と神山五郎がクリニック開設を準備しています。来年1月開院予定です。
当事者活動を中心にした、アディクション治療共同体の建設を夢見る近藤恒夫の快進撃がどこまで続くか。
皆さんどうぞご期待ください！



院長：神山五郎
医学博士 東京大学医学部卒
日本健康運動指導士協会会長



上野の街にはすでに看板が出現！



近藤恒夫(ダルク創設者)

看護師さん大募集！

アパリクリニックでは、アディクション回復支援に関心のある看護師さんを募集しています。我こそは、と思う方は、今すぐアパリにお電話ください。
TEL 03-5830-1790 アパリ東京本部

日本アディクト烈伝 その2

俺はヤク中でよかった！

辻本俊之（東京ダルク・スタッフ）

<司会(富永)の挨拶>

さて、好評の「回復者の体験談」です。今日は、東京ダルクのスタッフの辻本さんをお招きしました。今度、埼玉ダルクを立ち上げることになりまして、埼玉の行政の方たちと、勉強会とか講習会とかをやっている中心人物です。ゆくゆくは埼玉ダルクの責任者になる予定です。自助グループでは、僕のスポンサーをやってくれています。今回サンディエゴでは10日間、ベットを共にしました。間違えた、宿を共にしました(笑)。

僕がアパリで、手ごわいお父様お母様がたを相手に、家族教室の司会をやっていると話したら、援軍といいますが、力を貸してくださいということになり、今日のメッセージが実現しました。一応……そうですね、一時間くらい体験談をして頂いて、それから質疑応答という形をお願いします。

僕から見たらもう、遥かに先輩というか……自助グループ歴にせよ、クリーンの長さにせよ、病気の深さにせよ(笑)今日は僕からは一切、口を挟まずにお任せします(笑)……じゃ、よろしくお願いします。

* * * * *

はい、解りました。じゃあ、あの、体験談ということですね。

僕はいま、東京ダルクで職員をしています。シゲヤの方から埼玉ダルクの話が出ましたが、関東圏でダルクがないのが埼玉県だけなんですよね。埼玉の人たちは今、ほぼ東京ダルクを利用しています。

埼玉の仲間が入寮したとしますね、東京ダルクに。でも、東京ダルクに入寮しても、皆クスリ買うところを近くに知ってるから、地方に飛ばさなきゃならない。沖縄とか、仙台とか、地方に行ってもらんですけど、地方でプログラムを終えて、その人たちが帰ってくる時、地元に戻って来られない。社会復帰前の終了プログラムに入れないんですね、埼玉に戻ってきてても、ダルクにいったん戻って、そこから働きに行くっていう、それが非常に大切なアフターケアなんだけれども、入寮したくないっていう人たちの言い訳も、大半がそれなんです。ダルクに相談にきて、最初は入寮を嫌がる。でも、距離的には通ってこれる。じゃあ、その人たちが病院出てすぐに、埼玉から東京まで通ってこれるかって、まず無理です。それで、埼玉にデイケアがあればいいんじゃないかって思った。県の職員の人たちに声をかけて、この春に、さいたま新都心で5月と6月に連続講座を行ったんですね。来てくれた人のほとんどが、若い保健婦さんが結構多くて、行政の人たちばかりでした。そういう連続講座とか、ピアサポートセミナーとかやりながら、焦ってダルクを作るというよりも、行政から助成してもらおうところまで話をつめていこうかなと思ってます。

東京都の場合は、ほとんど確立されているんですね。相談は精神保健センター、医療は松沢病院ないし東部足立病院。それで、リハビリはダルク。ある程度、保健所レベルで確立されているんですが、地方ではそういう体制はほとんど確立されていない。東京の人たちは、やっぱりすごく早い段階で治療につながっていくんですね。でも、地方に行くとはいいかない。

僕の姪っ子が福井県に住んでいます。摂食障害者だと僕はずっと思ってたんですね。それを、一番上のお姉さんから相談されていたもので。先々月に、その姪っ子に会いに行ってきたんですね。僕より2~3歳年下で、僕には色々話してくれる。ずーっと話を聞いてみたら、摂食障害と薬物依存症っていうのと、買い物依存症っていうのが三つくっついている。僕はまあ、素人ですから、そういう見方をするんですけどね。専門家に言わせたらひょっとしたら精神病かもしれない。原因は何なのかって聞いていたら、姑さんの問題なんです。田舎ですから、長男坊の、大きな家に嫁いで結構、厳しい。お母さん方は知っていると思うんですけども、昔の人がお嫁にいたらどれだけ厳しかったかっていうようなことを……姑さんとの問題があってそこから発病したんだっていう話をしていました。「それで今、どう治療を受けているの？」って聞いてたら、ほとんど、昔の僕が受けた治療と同じなんです。

というのは、依存症を解っているお医者さんがまず少ない。病院レベルでも対応が出来ない。大量の睡眠薬が、いつも必要っていう。僕もやっぱり、そうだったんですね。最初についた病名が躁鬱(そううつ)病だった。次に躁



東京ダルク事務所にて。
コワモテのスキン・ヘッドとは裏腹の人懐っこい笑顔と
関西弁が仲間から愛されている。

鬱っ子も同じで、なにか病名がついて、県内の病院を転々としている。お嫁に行っているものだから、そこにはもういられない。実家に帰ったんです。実家というのは……僕のお姉さんはすごくパワフルな人で、自分のところで抱え込んでしまう。その旦那さんは「嫁に出したんだからもうあっちに面会してもらえ」という。5年間ずーっとそんなやり取りをくり返して、久々に会ったときには、もう死んじやうんじゃないかって思うくらい精神的に弱っていたんですね。

病院の話色々聞いていたら、その僕の姪っ子みたいな人が、10人20人単位で一つの病院に入院している。「友達が次々に死んでいくんだ」という話を聞いたときに、もしそこに、依存症に関する東京みたいなサポートネットワーク……保健所レベル、精神保健福祉センターレベルでの連携がいつもあれば、そんな状態になる前に、もっとオープンにして専門的な治療につながってこれるっていうのを、すごく感じたんですね。特に地方です。

埼玉でさえ、それを感じました。「じゃ埼玉で出来ればいいね」というので、はじまりました。東京の人って結構、幸せだなんて思うんですよ。本当に幸せだなんて思います。東京の相談機関はしっかりしている……しっかりしているっていうのも、この間シゲヤと一緒にいったアメリカの施設に比べれば、まだまだ50年くらい遅れているんですけどね。それでも、すごく幸せだなんていうふうには感じました。地方に行けばいくほど、そう感じますね。

僕は最初にその、鬱病、躁鬱病っていう診断になったのは、症状だけをみたからなんです。鬱病、躁鬱病の治療っていうのは、薬物依存者にとっては……僕にとってはもっともおいしい治療だった。覚せい剤の代わりに、睡眠薬と安定剤をいっぱいくれるから。こんな治療、最初にやられてしまったら、病院に一生置いてくださいっていう状態になってしまうんですよ。

母のお仕着せに苦しんだ

躁鬱病の治療……なぜそこまで行ったかっていうとね。僕、小学校のときから、いじめられっ子で、学校の先生にもいじめられていたんですね。友達

は、いっぱいいました。でも、自分のそのままの気持ちを言葉に出せた友達ってというのは、一人もいなかった。ダルクにきてから、そのことには気づいたんですけどね。真剣に喧嘩ができる友達なんて一人もいない。いじめられるか、いじめるかっていう、そういう関係だったんですよ。

両親に対してもそうでした。両親は本当に仲が悪かった。いつも喧嘩ばかりしていた。僕のお母さんは、僕のお父さんを侮辱する言葉をいつも出していた。いつも喧嘩ばかりしていて、お母さんが家の中でかかあ天下みたいになっていた。母親の気分が変わるとこっちがびくびくとするから、どうしても機嫌をとる。自分の感情を押し殺していく。で、自分が母親に好かれるような行動と言葉を、小さいながら、自分の心の安定を保つためにやっていたんだってということに、プログラムをやりながら気づきました。

ほくのスポンサーは、「普通の小学生だったんだね」って言うんですけどもね。でも、当時の自分はいじめられていることを友達にも相談できない。学校の先生に特別にいじめられていることを誰にも言えない。小学校の間、1年生、2年生、3年生って大きくなるにつれて、奥底にある自然に出来上がったのが、コンプレックスと劣等感。自分を嫌いになった。その時期に、根本的な性格が出来上がったんだらうなって思います。

要求はするんですね。すごく。言葉で。「あれが欲しい」「これが欲しい」「あれ買って」って。そういう要求はするんですけど、そこで与えられるものは、母親から見た良いものだった。これが一番辛かった。赤の服が欲しくて、母親から見たら赤は駄目なんです。僕、白が好きなんです。今でも白を着るのに緊張するのは、母親からみたら「すぐ真っ黒にするから、黒着なさい」という(笑)。そういうお仕着せがすごくきつかった。恥ずかしいんですけど、僕は高校生のとときまで……高校の1年生のとときまで、服って自分で買えなかったんです。買わなかった。母親が買ってくれた。中学校の時から、友達の持っている服も欲しかったし、街に買いに行きたかった。田舎だったから。高校生に入ると、京都・大阪までみんな、出て行く。僕、元々滋賀県にいたから、京都・大阪まで出て行く結構、いいやつがあったんです。

それが少しずつ……大人になるにつれて、反発心みたいなものになり始めたんですね。もう一つは、勉強。僕は同級生114人中、いつも52番なんです。どうしても50番をきれなくて。僕の上の兄弟3人っていうのは、県内でもトップ高校をトップで卒業している人たちで。勉強でもどんなにがんばってもそれ以上伸びない。僕の従兄弟とか、親戚は皆5番以内に入ってる。僕の一族の中でひょっとしたら一番勉強の出来ない子供だった。一生懸命勉強して、4から5に上がったところを誉めてくれるんじゃなくて、3から2に下がったところを叱られるんですね。叱られ方も「もっとがんばりなさい」って僕を責めてるんじゃなくて、誰かと比べて叱る。

これは、母親を責めてるんじゃないんです。自分自身がその……何ていうんですかね。自分の中にうっ積してしまった部分なんです。母親の態度が変わるのがいつでも怖かった。びくついてしまう自分がいました。直接の暴力とかはあんまりなかったんですけどね。

中学校に入ったとき、最初に楽しかったのはバレーボールなんです。レーボールを覚えて、練習を一生懸命すると、優勝しました。郡大会、県大会で。優勝カップ持ってクラスに帰ってくると、女の子たちがキャーッと拍手してくれる。それがやっぱり気持ちいい。気持ちいいことってのはやっぱり、自分の劣等感が癒されるんですね。それで、もっと練習をする。もっとこう、自分が癒される。自分が目立つ。もっとスターになれる。そのころミュンヘンオリンピックで全日本が優勝した年だったんですね。お母さんたちは知ってると思うんですけど、大河内とか、昔の森田選手とかがいました。自分は松下電器に入って、全日本に入る。で、オリンピックに出たい。そんな夢が初めて持ってたんですね。でも、小学校のときに将来何になりたいですかっていう作文を書かされると、隣の人のを、クラスで一番賢い人のを見て書く(笑)。それぐらいね、自分のイメージっていうのは、いまだに無いです。

よく近藤(恒夫)さんが「薬物依存者はこれが弱いんだ」って、「イメージが弱いんだ」っていうふう言うんですけど、その通りだなんて思います。今でもやっぱり出てこないですね。ビジョンに弱い。妄想には強いんですけどね(笑)。果てしない妄想には、ドバーっ三日間でも浸れるんですけども。でも自分の建設的なビジョンにはやっぱり、弱い。昔からそうだったんですね。自分自身が嫌いだし、やっぱりそういう生き方になっていった。小学校、中学校になるにつれて自然と、何かこう……気分が悪くなっていくばかりでね。

バレーをやるにつれて、抑えてたものが少しずつ出ようになっていったというか、友達というんな会話、表面的な会話をする、なんかうちだけ違う。僕の家はそのころ、すごく貧しかったんですね。お父さんが事業で失敗して、そ

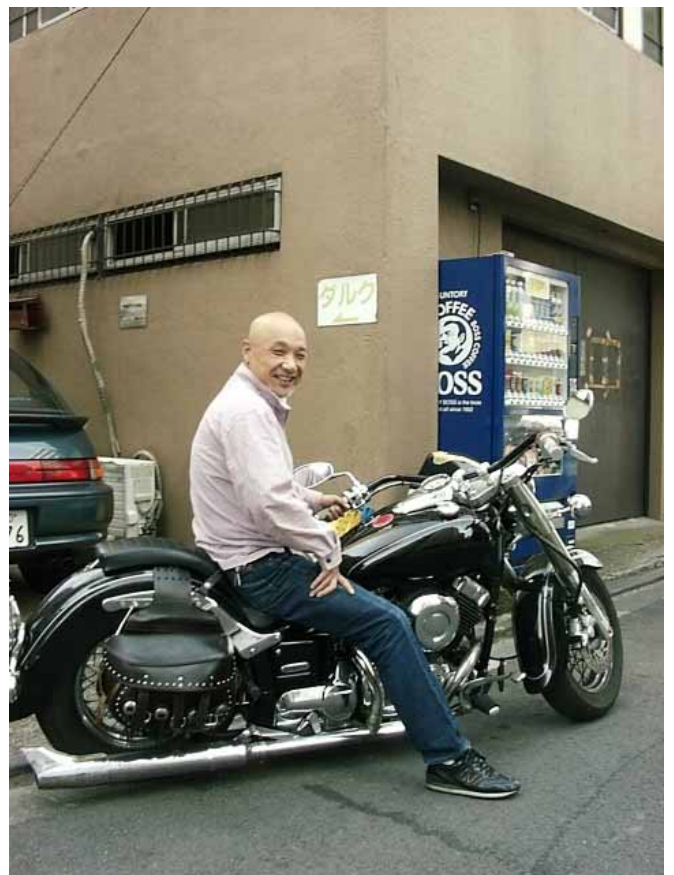
の借金を返している最中だった。すごく貧しかったから……ま、あの貧しさが今のたくましさなんだろうなって思いますけどね。バナナ1本もらえば、1週間かけて食べる。輪切りにして、自分のおやつは自分で取りに行く。琵琶湖で鮎をとって焼いたり。山に行ったら山菜をとったり、果物とって食べる。だから、食べることに限っては、生きていく能力はたくましいなって言われます。でもそれ以上はない(笑)。食べるだけ。そこまでは不自由しません(笑)。どこにいても、野宿しても不自由じゃなかった。でも、それ以上のビジョン、自分自身を高めていく、そこがやっぱり弱いと思います。

中学のときに先輩がいて、刺激が大好きだったし、好奇心が旺盛だったし、気分が悪いから気分の良いことをしたいから、夜になると街に遊びにいった。不良のすごく多い地区だったから、友達、小学校からの友達が不良してたり、遊んでいたりする。僕も自然と悪い……僕は悪いと思わないんですけどね。世の中で言う悪い人たちと遊んでいた。受験勉強があって、バレーの強い岐阜県の、私立のバレーの強い高校に行きたいっていうのを担任の先生に言った。先生が家にきてくれて、でも家族全員に駄目だって反対されました。何で駄目なのかっていったら、遠くに行ったら不良になるから駄目だって。でも、僕自身、もうなってるんですね。不良に。知らないのは家族だけで。たぶん、もっと不良になると思い、心配したんじゃないかな。

宇宙遊泳からスーパーマンへ

嫌々、公立高校に、それも女の人の全然いない男子校に行きました。全然面白くなかったです(笑)。男子校に行くと、最初のうちはバレーをやりました。友達関係がまたガラッと変わって、新しい人ばかりになった。2ヶ月、3ヶ月と経つとね、友達と深く関わっていけない自分はおかしいのかなって思う。やっぱり、それは感じました。友達と友達がどこかに遊びに行く。そうすると、誰も誘ってくれない。何となく寂しさは感じるけど「俺も誘って」の一言が言えない。疎外と孤独感みたいな。もう、3ヶ月で感じ始めた。

それは中学校の時もそうでした。受験勉強するときに誰も誘ってくれない。「しないの?」って聞くと「今日はしない」って言うんですね。でも、夜にこっそり見に行くと違う友達としていたり。そこで、何も言えない。そういうものが、ずーっとありました。友達とうまく関われなかったり、友達の中に深く入っていけない。親密になれない。すごくありました。



そのときに、シンナーを覚えたんですね。シンナー吸ったときに、こう……シャッターがバシャ ンって下りた。「おとぎの国にこんにちば」っていう。そんな感じです。ハリーポッターの映画の世界。自分が魔法使いになった。目の前の石が急に宇宙船に見えた。そこに宇宙人が座ってて、会話しながらこう……ぶかぶか浮かんで、宇宙遊泳しているようになるんですね。その間って言うのは、もう、何もかも考えなくていい。シンナーが効かなくなって、またシンナーを吸う。また翌週シンナーを吸う。そして友達関係がどんどん変わり始めた。2年間くらいそれを繰り返して、もうバレーも出来なくなりました。それを繰り返して、学校も休みがちになった。

2年生のときにバイクの免許だけとらせてくれたんですね。母親が。でもバイクは買っちゃ駄目だっていう。今から思えば不思議です(笑)。義理のお兄さんもバイクはちょっと辛抱しろと。3年生になったら車なら買ってやるからって。なぜバイクの免許だけとらせてくれたのかなって、今でも不思議なんですけど。結局はバイクは買ってくれなくて、自分はちょっと隠して持っていた。両親に。まあ、その頃が楽しくなかったかって言えば、それなりに楽しかった。でも自分は、本当にそれをやりたかったんじゃない。3年生になったら完全に不良です。どっぶり不良。ながい膝下何十センチっていう学生服着て、頭もこんなアフロで。今はこんななってますけど(笑)。リーゼント……その頃、キャロルがはやっていて、こんなリーゼント。矢沢永吉にすごく憧れてました。すごいリーゼントで、朝起きてセットするのに30分から1時間かかって、スプレー半分くらい…1本使っちゃうときもある(笑)。あるときから、やっぱり完璧症だったんですね。1回やって気に入らなかつたらもう1回頭洗ってセットしなおすっていうのが、3回ぐらいやるときがあった。

そのとき付き合っていた彼女がいました。その彼女とも好きで付き合ってたんじゃないんですね。まずセックスした。それから付き合った。その前の彼女もそうです。まずセックスした。それから好きになっていった。

本当に純愛したっていうのは中学校1年生のときに、初めて好きになった人がいた。その人以後っていうのは、その……まず肉体から入っていくパターンになっていったんですね。その彼女が、たまたま覚せい剤持っていて、「あなたもやらない？」っていうことを言われて。「まあ、いっか」って思った。断る理由がなかったです、さほど。

それで初めて体に、覚せい剤を入れたときに……シンナーなんか目じゃなくて、今度はスパイダーマンとスーパーマンが自分の中でミックスされたように、世の中のことは何でもできる。高3の、まだ働いたこともない、親の援助を受けて、世の中のことを何も知らない子供が、覚せい剤覚えました。

昔はラインがあったんですね。ラインのこっちの人は使わない人。使いたい人、使う人はラインから向こうの人。だから、自分はそこに行けないんですね。高校生だから。だから、どうしてもヤクザの人と付き合わざるを得ないっていう、そのラインがあったんです。今は全然なくなりましたけど。僕は高校生相手によくこういう話するんですけど、今は、そのラインがないからねって。昔はラインがあって、そこをいったり来たりするのがすごく辛い。昼はお昼の仕事があって、夜は皆さんがちょっと想像できないような裏の世界に自分のはついてちゃう。ここに行くくと、こっちに戻ってこれない。

なぜ、これを繰り返したかっていうのは、僕のお兄さんは今でも現役の警察官なんです(笑)。そっちの世界には行けないですよ。なぜかっていうと、お兄さんに迷惑がかかる。組織に入ることも出来ない、入っても名前をあげられない。結局、クスリを使いながら、兄貴に迷惑がかかる、兄貴に迷惑がかかるって、ずっと苦しみながら使っていました。高校を卒業するときにも、やめたくて仕方なかったんですね。なぜやめたかったかっていうと、そんな状況を行ったり来たりするから、普通は3年から5年かかって出る幻聴が、1年くらいで出るようになったんですね。罪悪感を持ちながら使っているから。でも、最初の気持ちよさを忘れられない。クスリ使うまでずーっと気分が悪かったから。その一瞬で、気分をスパーンって変えてくれたんですね。

昔の覚せい剤は、今の相場の数倍の値段がしました。ということは、10倍気持ちのいいクスリで、そんな高いクスリを僕が買えるわけがなくて、最初に母親の財布を探しました。どこにあるか解るっていうのが不思議ですね。少しずつ盗むんです。10万入っても2万が3万。全額は盗まないんです。解らないようにまた四つ折にして入れておく。また母親が責めるんですね。お前盗ったやろ。知らないって言い通して。母親が隠す場所を変える。でも、また見つかるんですね。見事に、で、また隠す。ずっとそれを繰り返した。で、その金で、クスリを買いに行く。でも、罪悪感を持ってしまっているから楽しめない。妄想が出て、苦しくて苦しくて仕方ない。人とも会えない。クスリを使っている自分はものすごく悪い自分。止めたっていう気持ちが出始める。すると、家から出れない。それを2年間くらい繰り返していたから、兄貴も知っ

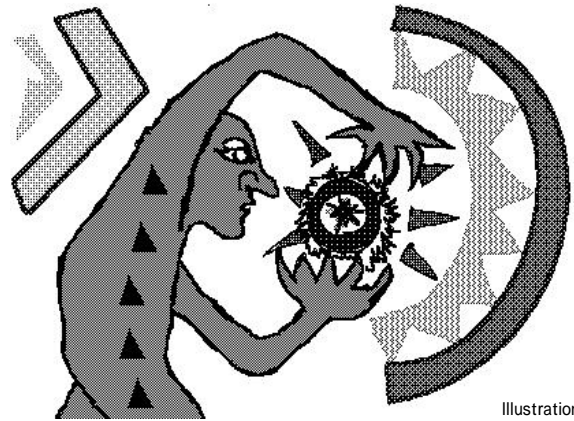


Illustration : PUSI

ていたと思うんですね。クスリ使ってるだろうって。でも僕は、精神病院に入って今の主治医に出会うまでは、誰にもクスリを使ってないって言い通したんですね。「使ってる」って言ったのは、同じ使ってる人だけ。使っていない人には言えなかった。他の人には一切、SOSを出せなかった。

何度、警察署の前に行ったら解らないです。クスリと注射器持って、「止められないです」って。でも、その瞬間出てくるのはお兄さん。お兄さんのお嫁さんがよく言うのは「あんたがクスリ使ったら、私らは路頭に迷わならん」って。使っていないときは「そうだね」って普通に話ができる。使いたくなると、そんなん全部忘れて、使ってしまう。

その頃から家が裕福になりました。借金を返し終わって、一人っ子みたいになってました。上の兄弟は全員結婚して。で、どんどん、お金が自分につき込まれた……というより、むしりとり始めたんですね。その当時の母親っていうのは、僕にとって現金自動支払機だった。母親の弱いところが自然とインプットされて、ボタン1・2みたい。ガラスを割れば1万円。戸を蹴れば2万円。お金を引き出すための道具だった。

母親の生きがいは、自分をまともにするっていうことになっていった。言葉は解らないですけど、それが生きがいになっていったんですね。自分だけに意識を向けかけて、それに対して家族全員が巻き込まれていった。

今朝ニュースで、渋谷で小学生が監禁された事件のことをやっていました。家を出していた中学2年生の人がお母さんに会う場面があって、「お母さんなんか大嫌いだ」ってその娘さんが言っていた。お母さんが「何で嫌いなんだ」って聞いたら、「家じゅうが私に集中する」って答えた。

同じなんですね。僕は案の定、高校のとき家出したことがあって、連れ戻されたんですけど。皆が僕に集中してくるっていうのがすごく嫌だった。自分を認めてくれなかったっていうのが嫌だったんです。肯定されなかった。肯定っていうのは「自分は自分でいいんだ」っていうことなんです。自分のすることを認めてくれない。駄目だ、駄目だ、駄目だ、駄目だ、駄目だ、駄目だ……そのまま社会に出てしまった。

幻聴、強迫、入院

クスリ使っていないとすごく真面目に働くんですよ、こう見えても(笑)。すごくやさしくて、すごく思いやりがあって、すごく良い子ちゃんでした。近所とか親戚の中ではちっちゃい時から良い子ちゃんだった。でも、自分は良い子ちゃんを演じてただけなんです。そんなに良い人でもないし、そんなに悪い人でもない。それを何年か繰り返しながら、23の時に結婚したんです。

結婚すれば、クスリ止められるかなって。別れた奥さんには悪いんですけど。結婚する数ヶ月前からクスリ止めて、住む場所を変えて「これでも使わない」「これでも使わない」って、何百回決心したが解らないです。それで、やっと結婚生活が始まったんですが、でもやっぱり使ってしまった。どんどん、ひどい状態になる。クスリを使うとどうなるかっていうと……もう人と会えないんですね。ご飯が食べられない。幻聴がずーっと聞こえる。「今、あなたの奥さんを……あなたがクスリ使うから、レイプしてるぞ」とかって、聞こえてくるんですね。僕は病院に行くまで幻聴を信じてましたから。次に一回使ったら、母親から50万とるとかっていう妄想が出る。今度は、母親の泣き声がずーと聞こえてくる。それがものすごく辛い。でも、また使う、また使う、また使う。それをずーっと繰り返したんですね。

10年間です。10年間繰り返した時に、離婚するかしないか奥さんともめた。その時に、今でもはっきり覚えてます。覚えい剤の人って、自分のやってきたことを見事に覚えてるんですね。どんなにテンパっても見事に覚えてます。はっきり覚えてます。奥さんのおじさんと大喧嘩になった。その時、お肉屋さんやってたから、お肉の包丁一気に5本くらい持って、子供抱えて、大暴れというか、ののしり合いになったんですね。ぱっと周り見たらパトカーが5台くらい来てて、野次馬が100人位集まっていた。そのまま夜中、京都までタクシーで連れて行かれて、精神病院に置き去りにされてしまった。

その当時のね、人生の中で僕が一番幸せを感じて、一番楽しかった時期っていうのは、子どもが生まれた時なんですね。子供が生まれる3ヶ月前、生まれて6ヶ月、約1年位使っていない時期があって、子どもをおふるにいたり、すごい幸せを感じていました。夫婦で一つのことやる。子供がどんどん甘えてくる。その頃はやっぱり幸せだったです。

でも使っちゃ。使っちゃと子どもは一切、自分になつかない。近寄りもしてこない。使っていないと、寄ってくるんですね。子供は敏感なんだなあって思いました。精神病院に置き去りにされた時に、一番最初に躁病っていう診断がついたんですね。何で躁病ってついたか自分でもわからない。結婚生活している間の自分の生活を、奥さんが先生に全部言ったら「躁病」。自分の警察官のお兄ちゃんが「中学、高校時代の弟はこうだった」と言えば「躁病」。家族の話で「躁病」ってついて、最初3ヶ月間入院したんです。

3ヵ月いて退院しても、また使う。また止める。その繰り返しになった。

ある日にね、クスリ使っても楽しいことがなくなり始めた。街を歩いていると、街を歩いている人がもう、自分にささやくんですね。「この街を歩かないでくれ」とか。電車に乗っていると、電車に乗っている人が「電車から降りてくれ」とかさやいてくる。後ろにいる人が「今からお前を刺すぞ」と言うから、ぱっと振り向くと誰もいない。「お巡りさんが今からお前を捕まえに行くぞ」と聞こえてくる。だから、よく解ります。覚えい剤の人がよく人を刺しちゃ。やられる前にやっちゃってという感じなんですね。僕はたまたま気が小さいからそれをやらなかっただけで、ガーッと気がさえてしまった時には、やってしまうって思う。自分を守るためなんですね。それは人の声……声を信じているから、そういうことになっていってしまうんです。

最後にはひきこもって、誰もいない場所で一人で過ごすのが、自分のクスリを使ったときの行動になった。2週間くらい家に帰らない。真面目に仕事してたら、突然ポンってなくなっちゃう。それは奥さんに見ればさぞ怖かったらうなって思います。急に夫がいなくなっちゃう。自分のクスリ使っている姿を見せたくないんですね。奥さんと子どもには、もう言葉も出ないし、小児麻痺みたいになってしまう。

つまり……「助けて」と一言、言えなかったんですね。

精神病院に入ってからが、今度は大変でした。躁病の治療をすると、睡眠薬をいっぱいくれるし、安定剤くれるし。たまに酒飲んでも怒られなかったんです。その病院は、躁病の治療してるから。

そこから一番辛くなったのは、それまで自分についていぬいに接してくれた自分の両親、自分のお兄さん、お姉さんから、一挙にごみ扱いはされるようになってしまった。いきなりめっちゃ言われるようになった。病院に入院して半年後に、病院で離婚届に判を、押したって言うよりも押させられたっていうのが正しかった。入院してから、子どもに15年間、一度も会ってないです。

離婚届に判を押して、それから2年から3年経ったら、もう病院の中で、おかしくなりました。当時は自分を抑える薬が本当に必要で、どんどん、どんどん、薬が増えていく。自分の小さかった時からの生き方が、薬を要求する時にも出ましたね。ちっちゃい時から母親に何か買って言ったら、駄目だって言われたら、買ってくれるまで泣いていた。人前であろうが、どこであろうが。あれを買ってもらおうと思った時に、駄目だって言われた時に、買ってもらうためにお父さんをコントロールしたり、隣に親戚のおばさんがいる時にわざと言ったりとか。薬を要求する時もそんなんですね。直接言っても薬くれないなって思ったら、先生が薬を出さざるを得ないような状況を作り上げていく。本当は具合悪くないのに、本当に具合の悪い顔になってしまったり。そういうふうには薬を要求して、ある時とうとう肝臓が悪くなった。主治医に酒をやめなさいって言われたんですね。でも、また飲む。そこで初めて依存症って言葉が出てきました。

「あなたは薬物依存症なんだ」

主治医に酒をやめなさいって言われた。断酒会に行行って言われたんです。断酒会に行行って、後ろで話を聞いていた。断酒会っていうのはおかしなところで、依存者本人が家族と来てるんですね。「昨日、娘にピアノを買った」という話を聞いた瞬間に、ふざけんなってイスを蹴って帰ったんです(笑)。先生に「合わない」と言ったら、AAに行きなさいって言われた。

そのときはまだ、NAもダルクもなかった。NAは大阪にあったかな。AAに行ったら、五人くらいでああでもない、こうでもないって話してました。「いやだ、もう行かない」と。それから五年間どこも行かなかった。

その五年間っていうのは、また楽しかったです(笑)。病院生活をエンジョイした。なんでエンジョイしていたかって言うのは、帰る場所がなかったんですね。家に帰れば母親が、1万円あげるから頼むから病院に帰ってくれて、お兄さんから「一応、帰って来い」と連絡がきて、お盆に帰る。お兄さんとかお姉さんとか来ていて、缶ビール1本目飲んだら2本目は駄目だって。そんな辛い状況ってないですよ。お兄さんは横で、ガーッと飲んでるんですね。「働いてないから駄目だ」とか「生活保護は駄目だ」とか、めっちゃ言われて。「仕事しろ」とか言われて「そんな睡眠薬飲んでから駄目だ」とか、また意識が自分に集中する。でも、自分は寂しいから家に帰る。両親の元に行きたい、お兄さんの元に行きたい。その時体重は130kgくらいあったんですね。睡眠薬太りと、ベットに寝たきりで。今は78kgなんですよ。パンツなんか一月くらい履き替ええない。洗濯する体力がない。髪の毛もいつもぼさぼさで、フケだらけ。病院でしか生活できないように段々、段々なっていました。まだ、そのときは躁鬱病の治療していました。

その時は4年間、覚えい剤使っていないで睡眠薬だけでした。隣にたまたま売人が入院していんですね。ヤクの売人が、今から思えばさぞ良かったことです。今でも僕、どこか、使うことは悪いことだと思わないんですね(笑)。その売人と出会ってなかったら、今でもそういう生活していたかもしれないんですから。使うことは悪いことなんですけどね。使うことは悪いんですよ(笑)。でもね、……結果的に、その売人と覚えい剤の話していたら翌朝、その人と買いに行っちゃった。その人が注文してくれて、そのことが病院の中で発覚してしまっただけです。病院の中で発覚してしまっただけで、そうしたら「さあ、大変」なんですね。その売人っていうのは今大阪ダルクでスタッフしています(笑)。今度、京都ダルクの責任者になる。僕がMAC、AA、断酒会につながる。はるか以前からの知り合いというか、その当時からの友達です。不思議ですね、人の出会いっていうのは。そんなわけで、病院の中で覚えい剤を使った。でも、治療プログラムはなかったんです。

その頃、たまたま主治医が入院しちゃって、新しい主治医になった。その



2002年の沖縄ダルク・フォーラム会場にて、いちばん手のかかるスポンシート。

主治医に「あなたは薬物依存症者だ」と初めて病名をつけられた。1, 2, 3, 4...6つ目の病院なんですね。躁病、鬱病、躁鬱病、精神病、強迫神経症とか色々な病名がついて、5つ目の時にはもう、「あなたの病気は解らない」と。解らないから、非定型精神病にしてくれて、よくわかんない病気がついてた。

それで、その主治医に、薬物依存症者だってことを言われました。言われても、嫌だったんですね。薬物依存症っていう病気が、病院にずっと居たいし、睡眠薬欲しいし、安定剤欲しいから、俺は「非定型精神病だ」と言う。「いや、あなたは薬物依存症だ」と……もう主治医との戦いでした。「明日



2003年7月、NA50周年コンベンションが開催されたサンディエゴにて。

から3年間かけてこの薬をなくそうって、最初に言われた診察がそれだったんです。3年間かけてなくそうって言われても、困るんですね。それからもう大変でした。130kgもあってベットから動けないような人が、急にMACに行こうって言われてもね……「嫌だ」って抵抗しました。でも、本当に僕はACが深いから「あっそう、好きにすれば」って言われると「ああ、行く……」ってなるんですね。回復していない薬物依存者は見捨てられる態度にすごく弱いから(笑)。「じゃ、行きます」ってなってしまう。好かれないんですよ、基本的に、人に。

その先生が良かったのは、「僕も一緒に行くから」って言うてくれた。病棟で、先

生と看護婦さんと初めて一緒に、自助グループっていわれている施設に行っただけです。その責任者が最初に僕に何を言ったかって、「12ステップは」とか「ミーティングは」とか一言も言わないで、にこって笑って「明日からここにコーヒー飲みにおいでよ」って、その一言だけなんですね。

僕は5分間じっと座ってられない人だったから、もう、むずむず、むずむず。自殺したいくらい、クスリを止めれば不安が出てくるし、クスリをのめば体中むずむずするから、ミーティング中ずっと、ばたばたばたばた走り回ってる。タバコ吸ったり裏でひっくり返ったりいるんなことして。

そんなわけで、週に一回MACに通うようになった。1年後に、その売人だった友達が、どんなとこ覗きに来て「こんな効かい」って机ひっくり返して帰って行ったんですけど、最終的に彼は、一番ハマった。「僕は横浜ダルクに入寮する」とか言うて行ったんですけどね。

僕は、電車に乗ることが出来なかったんです、その当時。その頃からですね。処方箋を減らされ始めてから、後遺症が出るようになった。電車とホームの間の隙間が怖くて、渡れなくて、3年間電車に乗れなかった。病院から出るともう、舌が飛び出して、よだれがたらたら垂れる。病院から出られなくなった。だから、病院に居たかったんですよ。あれほど嫌っていた精神病院に、居たくなってしまった。

でも、がんがん、がんがん責めてくる。病棟の中で急に、治療者たちの態度が変わっちゃった。依存症に対する治療が変わったから全員、態度が変わっちゃったんですね。睡眠薬が減らされていく。で、どうするか。ちっちゃいときからの生き方の癖が出る。睡眠薬と安定剤と、アンプルの注射と注射器を、病棟から盗む。どこの病棟でもポケットした看護婦さんが2~3人いるんですね。その人が夜勤の時を狙って、ごそと盗んで、病棟の自分の病室に隠しておいて、自分で使い始める。自分で注射器打ったり、睡眠薬飲んだりしていた。それで、それをある時見つけたんですね。男の看護師さんに。で、もう強制退院になるのになって、医局に自首しに行ったんです。「実は薬、盗みました」って。そうしたら、その先生はにこって笑って、「病気だから仕方ないよ」って。「病気だから仕方ないよ」っていう言葉をもらえて、初めて肩の力がスーンって抜けた感じでした。

がたがた震えながらダルクへ

でも、「ああ、そうか……病気なんだ」って思ったのも一晩だけで、次の日になったら「病気だから盗んでもいいんだ」って思いました(笑)。そこが問題だった。今だったら、「病気だから仕方ないんだ」っていうのを夜のNAに行って話して、次の日また持つんですけれども、なんせ、自助グループがなかったから、またせせせ、せせせと盗んで、盗んで自分を病棟が受け入れてくれて。そのうち、急に盗めなくなってしまうたりして、戦いだっただけですね、主治医と。どんどん、どんどん薬は減っていくし、入院も、させてくれないんで

すね。結局、最後に言われたのが「3ヵ月、今日から入院させない」って。それまで40回入院していたんです。6年間で40回も入院してしまっただけで、それが全部後遺症だった。横になる時にいつもローソンの袋が必要でした。不安妄想で、過呼吸が出ちゃう。それでも3ヶ月入院させない、3ヵ月経ったらまた2週間入院させてくれるって。「病院依存症だから」って言われました。3ヶ月の間は何があっても入院させないからって。

もう、すっごく妄想が出ていました。京都の山の側に住んでいました。左京区の。裏山が崩れてくるって思うんです、真剣に。雨が降ってくると、地盤が緩んで。本当に電話しました。消防署とか警察に。「裏山が崩れてくるから助けてください」って。横になれないから、ローソンの袋で息を整えて、睡眠薬を飲んで、酒を飲んで寝る。で、起きたらまた病院に行く。それを3ヶ月間、毎日繰り返して、2週間入院させてくださいって言って、2週間したら退院させられた。それを繰り返した。

そうすると、自分の生活範囲っていうのが、ミーティング場、病院、アパートの三角形なんですね。車も乗れないし、手に泥がつくと、一晩中洗っている。真っ白になります。でも「ばい菌が落ちない」と真剣に思っている。その時は本当に、自分は薬物依存症者じゃなくて非定型精神病かなって思った。でも「あなたは薬物依存者だ」って言われ続けた。

その先生のことが好きだったんですね。だから、その先生にくっついていった。グッて最初に惹かれちゃった。で、そのころNAのメッセージが病院に入りました。最初、この人たち何しに来てるんだらうって思いました。「NAメッセージ? なんじゃ、そりゃ?」って。でも毎月コーラを買ってきてくれるんですね。そのコーラを飲みたくて行ってた。今、僕はたまにメッセージに行くんですよ、月に一回くらい。そのとき僕はやっぱりコーラを買っていきます(笑)。何でコーラが欲しいかっていうと、処方箋のんで、まずい飯ばかり食ってるから、コーラがおいしくて、おいしくて。

話は「明日からハワイにギャザリングに行く」とか、訳のわからない話してらなかって思ったんですけど。海外に行くっていうのは、月に行くっていうくらいの距離感でいたから。でも、メッセージが来て、またメッセージに来る、メッセージに来る。で、段々、段々その人たちが面白くなり始めた。でも僕は電車に乗れない。大阪までいけない。MACに毎日行ってるんですけど、MACに行ってる間も酒が止まらなかったんですね。毎日酒を飲んで。ミーティングの1時間だけは酒を飲まない時間でした。ほとんど酒の飲みっぱなしです。生活保護のお金をほとんど酒に費やしていた。

それで、何がきっかけか解らないんですけどね。そんな時に大阪にダルクができるぞって、でも、できるぞっていわれても、「行きたくない、行きたくない」って言うていました。僕の隣にいたその売人が先にダルクに入ってたんですね。おいで、おいでと言われていた。僕はそこまで行く体力がない。

そうしたら福祉事務所の人に、主治医のところと一緒に言うて言われて。主治医のところに行って「何年経ったら良くなりますか?」って。こっこの関心は、あと何年間、生活保護受けられますかっていうことだった(笑)。「ダルクに行っても生活保護受けられますか?」とか「ダルク退寮しても生活保護切られないですよ」とかそんな会話ばかりしていた。そこに執着してた。

初めてダルクに行く日に、いま大阪ダルクでスタッフをやっている仲間が一緒に行きあげると言うので朝行ったら、やっぱり一人で行ってとか言われた。一人で言うていわれても、電車に乗れない。今でも覚えてます。初めてダルクに行った時は、一人で電車のガラガラの誰も乗っていないところの通路の真中でガタガタ震えてた。……で、ダルクに行って、面接をもらった時、すごい怖いとこだなって思った。ヤク中が怖かった。一緒に生活するようになって怖かった。精神病院が長いから、皆のペースについていけないんですね。皆に蹴られたり、灰皿片付けろって言われたり、一週間くらい風呂に入らないから、風呂入って言われたり。そうされながらも夜、皆とする会話が楽しいんですね。あそこはクスリは良かったとか、あそこはクスリは安かったとか、あそこは薬局のブロンは盗めるねとか。数々やってきた話ですごい楽しい。それで、「なんとか島に、ラウンドアップに2泊3日で行くんです」なんて話をしてくれた。それが楽しかった。家族に一番してもらったことだったんですね。ダルクで、家族にもらいたかったことをダルクの仲間にしてもらえた。ラウンドアップ行ったり、カラオケ行ったり、旅行に行ったり。少しずつダルクの魅力、仲間の魅力を感じ始めて、どんどん、どんどんスリーミーティングに、ダルクの仲間とミーティングに行く。仲間にもまれてミーティングに連れて行かれた。振り向いたらクリーン3ヵ月、振り向いたらクリーンが6ヶ月。クリーンが続いてきたんですね。

彼女の分まで生きよう

ある時、処方薬を切るために病院に入院させてもらって、最後の処方薬をバーンって切ってもらいました。それから3ヶ月間位っていうのは睡眠時間2~3時間。5時ごろ寝たと思ったら、7頃起きる。どんどん、どんどん痩せ始めて、130kgが、1年間で78kgまで落ちた。クリーン1年。初めてもらいました。

でも生活が変わってなかったんですね。というのは、お金がなくなると、また母親に送ってもらう。当時はまだ生活保護受けていて、皆さんの税金でフーズクに行く。そりゃやっぱり神さまは怒りますよ(笑)。お金がなくなると、万引きした。生活必需品を毎日毎日、万引きする。別に困ってないんですね、生活することに。万引きをする、フーズクに行く。ミーティング行っても万引きしたとかの話はしない。よい話をする。お母さんに金を送ってもらう。ダルクに送ってもらうんじゃなくて、郵便局止め。それで自分で取りに行く。またそれで遊ぶ。クリーンは2年間続いたけど、2年後にクスリ使っちゃいました。大阪ダルクを退寮した2週間後に使ってしまった。一生懸命部屋を揃えたとこで、また全部ばっしってしまった。それがきっかけで、関東の方に来たんです。

関東に来てすぐクスリは止まらなかった。一回使い出すと中々止まらないんです。東京ダルクに入寮させてもらったんですけど、止まらなかった。その前に茨城ダルクにいたけど、やっぱり使っちゃった。

生まれて初めて拘置所に入ったんですね。1ヵ月半。クスリ使って癖の中に入ったのは、生まれて初めてでした。その時にも「お兄さんに迷惑が」って、.....まだその時、言っていましたね。それでも、出てきてすぐクスリ使っちゃった。ダルクに入っても使っちゃって、強制退寮。2階から荷物投げられた。荷物抱えてダルク出て行きました。

さっき言った「食べるに困らない」って言うのは、荒川の土手で野宿していたら、浮浪者が「これ食べるか」って弁当持ってくるんですね。プライドがあってやっぱり、浮浪者の弁当は食べられなかった。お金も残りは160円。いつも160円持っているんですね。なぜか。なぜかっていうと、ダルクまで行く最低自動車賃で、どこか思っているんです。茨城を飛び出しても160円。上野で逮捕された時も160円。それがあればワン区間乗れる(笑)。

野宿して、なぜか覺せい割だけ持っていたんですね。8日間くらい寝ていなくて、何も食べてなくて、何も飲んでなくて。もう、がたがた震えているだけ。草むらの上で。その時に.....今でも覺えています。泣きながら覺せい割を使っていたんですね。どうしてここまで使ったかって、泣きながら。

バーンって、思いっきり入れたら、何か.....神様が助けてくれたっていう。今から思えば、助けてくれたんです。

僕が京都にいたときに、「クスリと一緒に止めていこう」って付き合っていた彼女がいて、その彼女が幻覚で自分の目の前に出てきたんですね。お姉さんも出てきた。僕の手を握って「このままこんなことしてたらあかん」って、手を挙げられて、そのまま茨城ダルクまで行ったんです。ダルクにいったら岩井さんに「今度は野宿してクスリ切って来い」とか言われた。で、野宿してクスリ切ったんです。1ヶ月間チャリティで入所させてもらいました。全くチャリティで。お金なんか一銭もないし、福祉も切られてるから。

その時、その野宿の最中に、彼女が出てきた。お姉さんがでてきたって言いましたが、僕はそれが、神様が働いたって思うんです。茨城ダルクに行ってから分かったんですけど、幻影で僕を助けに来た8時間前に、彼女は京都でクスリ使って死んじゃってたんですね。「それが新聞に載ってたよ」って仲間に言われた時に.....彼女とはもう別れて1年半ほど経ってたんですけど、いずれはヨリ戻したいと思ってたから、「ガーン！」ってなっちゃった。

でも、そこでは使わなかった。茨城から京都の彼女の家に、お線香上げさせてもらいに行きました。そしたら、彼女のお母さんが僕に「としちゃんも数少ない回復者になってくださいね」って、たった一言、言われたんですね。

その時、死のうと思っていました。京都駅から飛び降りようって。その時だけは、お兄さんに迷惑がかかるっていうのが出てこなかった。でも、お母さんのその一言が、彼女が彼女のお母さんを通して言った言葉だったんだと、

自分で理解した。

たった一人、京都駅で「さあ、どうしょ」って。生まれて初めて自分で決心しました。「クリーンを続けよう」って。それまでは彼女のためにとか、母親のためにとか、お兄さんに迷惑かかるからとか、誰かのためだったんですね。その日だけは、自分のためにクリーンを続けようって思った。彼女の分まで生きようって。そういう風に決心して、京都から、茨城ダルクまで行きました。160円で。なぜか。それは、悪いことだとは思ってないんですけど、自分の回復にとってはね。そのうちIRに埋め合わせしようかなって思ってるんですけど(笑)。で、茨城ダルクに戻ったわけです。

僕の人生だから！

そのときから、人に良く思われたいとか、何か言われたときにビクッてるのがなくなった。「自分のクリーンを続けるんだ」って、それしか考えない。「誰にどう思われてもいいんだ」って。岩井さんにバーンって何か言われても、「いや、俺はクリーンを続けるだけだから」って言えた。ミーティングでも、自分の本当に恥ずかしい話をできた。隣の人がクスリ使っていても気にならない。クリーンを続けることしか考えてない時期だったんですね。

で、神様の計画で東京ダルクの方に移動になって。東京ダルクでも、自分のクリーンを続けることしか考えなかった。「一番好きなもの棚上げしろ」っていうプログラムがある。じゃ僕が一番好きなのは何なのかっていうと、クスリと酒と女(笑)。これは、ヤク中のほとんどがそうなんですけどね。じゃ、女性の肌には自分で働いて稼ぐまで、それまでは触れないって決めたんですね。決心したとおりにやりました。生活保護を切って、給料もらうまではデートをしない。余分なお金は持たない。それからは毎日、毎日、毎日、ミーティングにいくのが楽しい。いろんな話したいことがいっぱいある。ちっちゃいときから、今までのこと、全部。それで、8ヶ月で東京ダルクを円満退寮しました。

退寮する2ヶ月前から働きにいこうと思った。その当時は、クスリ使っている時と全く反対のことやろうと思って、お肉屋さんやってたから魚屋さんに行こうと思って、魚屋さんに面接に行ったんです。魚屋さんに行って、「実は僕はダルクでこういうことやってたんだ」って言ったら、ああ良いですよって言われた。「仕事にお酒飲まなければいいですか」って。帰りにそこのおばさんに「あなた偉いですね」って。「何で？」って聞いたら、「好きなお酒やめてるんですもんね」って言ってくれた。

自分の世の中に対する価値観が、その時からコロッと変わった。自分のやってきたことがめっちゃくちゃだと思っても、受け入れてくれるところがあるんだって思えたんです。2年間働いた。東京ダルクで4年前から仕事を始めたんです。それでも、自分に出始めた問題って言うのが、別のアディクションの問題だったんですね。アディクションっていうのが、どこからきてるのかあまり解らないし、専門的なことも解らないんですけどね。回復にはあまり関係ないから、自分はもう専門的な知識を勉強するつもりはないですよ。

4年前に、仲間と一緒に「モーニング娘。」のコンサートに行ったんです。社会人のやつと6人で。すごくコンプレックスがきつかった。どこにいて



も「ごめんなさい」「ごめんなさい」なんですね。社会人の4人は楽しんでるんですね。ワーッと手を上げて。僕と仲間だけが一時間腕組みして、ジーンとしてたんですね。2万人が踊っている最中にジーンと。恥ずかしくて踊れない。その時に解ったのが「矢沢栄吉のコンサートに行った時もクスリを使ってる時だった！ おれはシラフじゃ何も出来ないんだ！」っていうことでした。誰も、僕を見てないのに、すごく畏縮してしまっている。それからです。自分の自己表現に、自己を表現することにクリーン2年目くらいから力を入れました。アサーティブ・トレーニングに行ったり。人に嫌なこと言われたら、自分の心を探って、気持ち人を人に伝えたりとか。カウンセリングにきっちり3年間通ったりしました。僕の心に開いていた穴を長い間、クスリが埋めていた。今度クスリを止めたら、空虚感になってしまふ。そこに、仲間が入ってきてくれましたね。自分自身を誤魔化すことがアディクションの源だったんですね。本当に誤魔化すことばかりしてきた。誰かに嫌なこと言われたら、本当はむかっているのに、にこって笑って後は誤魔化していた。そういう細かいところ、一つ一つ注意していったら、やっぱり少しずつ楽になり始めました。

それからコンサート沢山行きました(笑)。浜崎あゆみ行ったり、MAX行ったり、MISIA行ったり。メジャーっていわれているすべてのコンサートに、僕の元・主治医と行ったり、さっきシゲヤが言った埼玉県庁の職員の人たちと行ったり。結構ね、行くとな、段々と自分が解るんですね。

こないだ、好きだった人に、生まれて初めて告白したんです。人生の中で生まれて初めてでしたよ。いつもセックスしてから付き合うって言うてたでしょう。2年間ずーっと一緒に歩いてきて、一緒に遊んできて。で、ケミストリーのコンサートに2人で行って。で、前の日から練習して。この曲で手をつないでとか紙に書いたりとかして。ケミストリーの「君をみつめた」っていう歌があるんですね。この歌の、このフレーズの時に言おうと思っていたら、その歌だけ歌わなかった(笑)。「一番ヒットしたのに何で歌わないんだ！」って。で、帰りに好きなんだって。一言じゃなくて「こういう理由で好きなんだ」って言ったんですね。今まで言えなかったんだっていうことも全部話したら、見事に振られた(笑)。「ごめんなさい」って。でも、すっきりしてるんですね。悔しさも何も無い。精一杯やった。そのまま、その人との関係は続いてるんですけども。やっぱり、自分は長い間、そういうことが出来なかったんですね。僕は女性に対して怖いから、体から入っちゃえば楽だった。でも、それが生まれて初めて出来た。それはカウンセリングをやってきた成果だと思っています。

家族の関係も今は戻りました。三年前のお盆だったかな。京都のお兄さんの所に行ったんですね。彼女を失って、半年後にお母さんが亡くなった。その半年後に、お父さんが亡くなった。今では援助してくれる人はいないんですね。それはすごく良かったです。

お兄さんの所に行った時に、お兄さんが「何でまた使ったんや」って。でも僕が、アル中が酒飲むよなもんだって言ったら、にこって笑ってくれた。お嫁さんが「頼むからあと7年間おとなしくして」とって。何でかという。とお兄さん定年退職まで後7年なんですね。でも、その時初めて言えたのが「僕の人生だから」って。「今、楽しいから」って。そうしたら、にこって笑ってくれた。

去年の暮れに、初めてそのお兄さんから電話がかかってきた。「東京に行くから、東京案内してくれ」って言うんですね。僕のお父さんは軍人さんだったんです。近衛兵だった。いつも皇居、皇居って言ってたから、代わりに親父が来るんだって思って、皇居に案内してあげようと思った。東京駅に迎えに行って、皇居に連れて行ってあげた。また前の日にいろいろ考えたんです。妄想みたいに(笑)。「あそこでご飯をおごってあげて、ここで土産買ってあげて、ここでご飯を食べさせてあげて送って行くんだ」って。お昼食べ終わったら、兄貴が先に金を払っていた。駐車場に入れたら、兄貴がやっぱり金を払っていた。全部、払われちゃった。東京駅に送る時に一言、「迷惑をかけてすいませんでした」って言いたかったんですね。それが言えなかった。ずーっと長いこと、コンプレックスを持っていたから。兄貴の横で「迷惑を、迷惑を、迷惑を……」ってブツブツ言ってるんですけど(笑)、その先が中々言えない。「どうしたんだ？」って聞かれて「迷惑を」って言っていた。そうしたら、にこって笑って「元気にやっているならいいよ」って言われて、ぱっと2万円差し出されて「正月だから小遣いにしとき」って言われて。「ありがとぅ」ってもらってるんですね(笑)。

でも、去年の始め京都に行って、手はつかなかったけど、「今まですいませんでした」って言ったんです。それが、精一杯の僕の埋め合わせでした。

俺はヤク中でよかった！

今は、楽に生きています。自分自身を誤魔化さずに、自分のサイズで。たまに、はめはずすんですけど、はめをはずすと、仲間が元に戻してくれる。おかしいよって。そういうふう生き始めたら、クスリを使う必要がない。今の僕にはクスリは必要はない。アルコールも必要はない。もっと落ちついて来ると「なんであそこまで、母親が自分に、ガンガン、ガンガン、ガンガン言ったのかな」っていうのが、解り始めてきた気もするんです。ああいうふう自分に言っていなかったら、僕はどこかで死んでいたんじゃないのかなって。僕の性格を見抜いていた。むちゃくちゃやったから。もし、母親が後ろで尻尾握っててくれなかったら、もう12歳13歳で家飛び出しちゃって、ヤクザに入って殺されていたかもしれないし。クスリを思いっきり打って死んじやってたかもしれない。そういう性格だから……母親のおかげで罪悪感を持っていたから、これだけですんだのかなあって。

シゲヤとNAの50周年に行って、「俺はヤク中で良かったな」って、しみじみ思いました。何万人という薬物依存者たちがいて、仲間たちの中で一体感を持って楽しめる。「薬物依存者で良かったな」って思いました。真の友達がいなくてさびしくて生きづらかった頃に比べたら、別の人生です。

でも、今度生まれてくる時は薬物依存者になりたくないですね。今度は健康な生き方もしてみたい。でも、30分であなた死にますよって言われたら、一発だけやりたいですね(笑)。この矛盾が病気なんだろうなって思います。

やっぱり生きづらさ、なんですね。気分の悪い生きづらさ。生きやすくなってきたら、もうクスリは必要ない。家族会とか、下谷センターにも明日行くんですけど、家族の方にお伝えしたいのは……本当に多いんですね。僕と、僕のお母さんと同じなんです。「自分の子供殺すの？」って言いたくなる。それが、すごい多いですね。下谷センターで、インテークを取るお手伝いをさせていただいているんですが、こっちは何も言えずに聞いているだけなんだけれど、本当に「殺すの？」って言いたくなっちゃう。

僕のお母さんは恐らく、お母さん自身が自分のことを嫌いだっただけなんです。自分が嫌いで、自分に劣等感を持っていたから、それを僕にぶつけてきた。それが最近、解ってきましたね。

もし今日お父さんお母さんがいて、子供さんがこういう問題が出たときに、まず夫婦間のセックスがうまくいってるかって、聞きたいです。ほとんどが、うまくいってないって言いますよね。両親がうまくいってない。もし、夫婦間がセックスがうまくいってれば、大体家族は落ち着いていますよ。

夫婦間が、お互い相手のことが嫌いだったりすると、それをどこかで出しちゃう。そのへんを理解してくると、子供のクスリを止めさせるために家族会に来るんじゃないかって、自分自身のケアのために家族会に来るっていう形になるはずなんです。そうしたら、自然と子供のクスリは止まってくる。僕はそういうふう理解してます。その辺の、病気のメカニズムっていうやつを。やっぱりそんな気がしますね。

じゃ、このくらい。

2003年7月22日 アバリ家族教室の講演より再構成
(文責:富永滋也 フェローシップ・ニュース編集部)



サンディエゴにて、アメリカのNAメンバーと。 見よ、二人のこのニヤけた顔を！

サルでもわかる

アディクション講座

第7回 「シラフで生きる」



秋深まりしある日、珍しく落ち着いた声のサルからの電話があった。
トルルルル.....ガチャ

相談員 はい、アバリです

サル こんにちは、サルです。

相談員 ああサルさん、こんにちは！ お元気そうですね！

サル ヘヘ、いつも、ろくでもない電話ばかりでごめんなさい(笑)。ボク実は、またもらっちゃたんですよ、キータッグ(1)。

相談員 えっ？ おめでどう！ 1ヶ月？

サル ホワイトキータッグですよ！(2)

相談員 ぶっ.....ははは！ やったじゃないですか！ おめでどう~(電話口で拍手)

サル 実は.....ずっと飲んでたんですよ、お酒。

相談員 そうか。酒も問題だって認めただんぞ？

サル そうなんです.....クスリはやめてるんだから、酒飲んでてもクリーンだってずっと思ってた。コーヒーだってタバコだって、みんなうまく使ってるんだし。そう思って.....そう思ってたのに、なんとなく、ミーティングではいえなかったですね。ずっと、「クリーンは？」ってきかれるたびに、うしろめたくて。

相談員 うんうん。

サル でもクスリ使ってるときは違う。うまく使えてるから別にいいじゃないか、って.....でもやっぱり、変なんです。やりたくないこと、自信のないことをやるうとするときに、飲んでた。ムシャクシャするときに、飲んでた。それに気づいたのが.....先月、猿回し仲間の、結婚パーティーに出たんです。

相談員 うん。

サル ボクほんとは、すごく.....くやしかった。ちっとも、祝う気になんてならなかった。ボクは、ボクだけがこんなに.....寂しくて、ひとりぼっちで、なにもうまくできなくてこんなみじめな生活してて.....式に来たみんなは、安定した収入と名声と幸せな生活を保障されて.....ち、ちくしょ。

相談員 そうかあ.....それはキツかったね。

サル また、そいつのヨメさんが、めっちゃめっちゃ可愛いし.....くやしくて.....みじめな気持ちを感じたくなくて.....でも、仲良しのその仲間を、祝いたって気持ちも、あるんですよ。心の底からおめでどうといえない自分のケツの穴の小ささがまたくやしくて.....もう、わけわかんなかったですね。会場に向かう途中、もう飲んでました。

相談員 ああ~ そりゃ飲むわ(苦笑)

サル 会場に着いてからは、そんなことに嫉妬してるなんてカッコ悪いところ、見られなくなかったんだ。それで.....飲めばイヤな気持ちは忘れて、楽しい気分だけ盛り上がるはずだった.....でも、酔いが回るほど、寂しいとかくやしとか、忘れたかった感情ばかりがどんどん



ふくらんでいって、忘れたくてもっと飲んで.....

相談員(黙って何度もうなづく)

サル 盛り上げよう、盛り上げなきゃって、頼まれもしないのに、ガンガン、イッキ飲みして.....いまやプロで猿回しやってる連中の前でボクにできる芸なんてない、そう思うと余計みじめで.....でもお祝いの席だから、楽しくしなきゃ、笑っていきなさいけないうって.....

相談員 うんうん。わかるわかる。

サル ついに、ボクの芸は、ゲーだけに.....

相談員 う、う~ん(苦笑)

サル 気がつく.....ゲロまみれの引き出物(もちろん、持ち手が片方ちぎれている)を枕に、カラオケボックスの隅でころがっていました。ボクが気づいたとき、みんなは「てんとう虫のサンバ」(チェリッシュ)を合唱していました。

相談員 (悲痛な声で)ああ.....

サル あんなに悲しい「てんとう虫のサンバ」、一生忘れないと思います。どんなに謝っても後悔しても、もう取り戻せない.....ボクは、大事な友達の、一生に何度もないお祝いの日を、プチ壊しにしてしまったんだ。

相談員

サル あとできいたら、そのカラオケでボクは「わかれうた」(中島みゆき: 3)を熱唱していたそうです。サイアクですよ.....覚えてもいないときに、自分が最低なことをしてしまっていた.....謝ろうにも、思い出せないんですよ.....

相談員 わかりますよ。僕も、酒でスベったことがありまして.....

サル えっ？！

相談員 プログラムにつながって3ヵ月後だったかな。もらったキータッグを全部、返しました。(4)

サル 相談員さんも、酒でコケたことがあったんだ.....

相談員 つながり始めの頃は、反発ばかりしてたんですよ、僕。ミーティングに出ても「自分は、こいつらみたいに壊れちゃいけない」と、内心では仲間を馬鹿にしていたし。スポンサー(5)も、とりあえず選びはしたものの、本気で信用してはなかった。

サル

相談員 ある日、スポンサーに言われたんです。「プログラムを真剣にやるつもりがあるのなら、90日90ミーティングだ。3ヶ月間、毎日ミーティングに行け」って。それまではいつでも冗談半分で、笑いながら僕の話聞いてくれていた人だったんだけど、そのとき初めて、厳しい表情で言われた。.....そして、その晩でした。日本酒を一升、飲んじゃった(笑)

サル 一升？ また、ずいぶん.....(笑)

相談員 ははは.....元々そんなに強くないんだけど、あのときの飲み方は異常だった。自分の部屋で、瓶を抱えて飲んでいて.....途中からわけ分からなくなって、目覚めたら朝。メチャクチャでしたよ。借りてきたAVが散乱した部屋で、すっ裸で寝ていた。へべれけの妄想ハーレム状態になってしまった(笑)。

サル ぶっ.....ぶははは！

相談員 (笑って)泥酔していくなかで「もっと酔いたい」

「もっと気持ちよくなりたいたい」って思っていたのを、おぼろげながら覚えていました。アルコールの酔いを、クスリと同じように使っていたんですよ。

サル クスリと同じ.....

相談員 そう.....あのときの僕を異常な飲み方に走らせたのは「怒りの感情」だったんだなって、今では思うんですよ。「俺は、なりたくて依存症



なんかになったわけじゃない！」「なんだ、こんなプログラムなんて！俺は自分の力で回復できるんだ」なんて、腹の中では思っていた。そんな気持ちに嘘をついて表面だけ取り繕っていたから、スポンサーに厳しく言われたときに、ためこんでいた「怒りの感情」が爆発した。「俺は酒には問題がないんだ、飲んでやる！」って思っただけで、……でも、一口飲んだら止まらなくなっちゃった(笑)

サル ううっ……笑えない……

相談員 目が覚めたら、クスリ使って潰れたときと全く同じ状況に、自分になっていた。もう、受け入れざるを得なかったですね。「ああ、駄目なんだ。俺、酒も飲めないんだ……」って。

サル そうか……相談員さんも……

相談員 僕たちアダクトにとって、酔いをもたす物質は、なんでも一緒なんです。怒りとか悲しみとか寂しさとか、封じ込めていたすべての感情に火をつける着火装置になる。押さえ込んでいた感情が苦しければ苦しいほど、核爆弾のスイッチを押すようなことになってしまう。自分の感情の問題をミーティングで解決できるようになるまでは、僕たちはいつでも爆弾を抱えて生きているようなものなんです。

サル そうか……吹っ飛ばして解決するんじゃないかって、バクダンそのものを片付けなくちゃ……

相談員 そうです。……その晩、僕は、ミーティングで初めて泣きました。自分のみじめさが悔しくて、情けなくて。そうしたら仲間たちが、本当に暖かく迎えてくれた。「よく正直になれたね」「大丈夫だよ、また一緒にやろうよ」って。

サル ぼ、ぼ、ぼ、僕のときも、そうでした。ウキキー！みんなが、みんながすっごく優しくしてくれて……それで僕、「ああ、僕はいま、ここにいることが許されている」って思えたんです。新しくもらったホワイトキータグを「大切にしよう」って、そのとき初めて、心から思えたんです。

相談員 (笑って)僕も、そうだったな。僕はもともと、すっごく高慢な人間で、内心では仲間を裁いてばかりでしたから……。「ああ、本当に自分も依存症なんだ。回復が必要なアダクトなんだ……」ということを受け入れられたのは、あれが最初の経験だった気がする。リクスやスリップが回復のステップだった僕たちが言うのは、そういうことなんです。失敗することだって必要な場合があるんです。

サル スポンサーさんには……怒られなかったんですか？

相談員 大笑いされました(笑)「そうか、よかったな。で、何発抜いたんや？」って。

サル あははは！

相談員 でもね、今では感謝していますよ、スポンサーに。僕は、失敗して怒られることに対してすっごくビクビクする人間だから……。「何やってんだ、おまえ。馬鹿か？」とかって、あの時もし言われていたら、それだけで駄目だったと思う。「ああ、僕が失敗してもこの人は、こうやって受け入れてくれるんだ……」そう思えたことが、あのときの僕には何よりも、大切だった。

サル ……なるほどなあ。相談員さんにもそういうときがあったんだ……

相談員 ははは……あったなんてもんじゃありませんよ(苦笑)

サル ボク、今回のスリップでつくづく、思ったんだけど……酒やクスリでの失敗の数々で、迷惑かけたこと、恥かいたこと。それはもちろん、つらかったんです。でも……例えばあの結婚式のときだって、みんなはボクのことを盛り上げ役と



考えている部分もあるのかもしれない。でも、ボク自身はこんなやり方、もうたくさんだと思ったんです。酒の力を借りて、何かをしようとしたこと、それ自体が、クスリ使ってたときと、同じだ。自分に都合のいいことだけにクスリの力を借りて、忘れたいことをクスリで消して。うまくやれると思ったら、かえってなんかもかまをブチ壊しにして……こんな生き方は、もう続けられないって思ったんです。

相談員 うんうん。

サル そのときになぜか「ミーティングだ」って思ったんです。「ミーティングに行かなきゃ」って。

相談員 そうか。底をついたんだね。(6)たいへんだねえ……クスリで底ついて、仕事で頑張りすぎて底ついて、今度は酒か(笑)

サル 回復したい……神様助けて……って思ったときに、「もうボクにはミーティングしかない」って初めて思えたんです。

相談員 どうですか、新しいクリーンの日々は。

サル ううー。何なんだろう。しんどいですよ毎日。1ヶ月とか、使わないでいたことは何度もあったはずなのに……ぜんぜんちがいますね。なんだかね、一日、一日が、重い……こんなに1週間、1ヶ月が長い、って感じたの、小学生のとき以来です。

相談員 違いますよね。ひとりでやめてみて、止まってた時期と。単純に考えたら、ひとりで歯をくいしばってやめるより、仲間なり神様なりが助けてくれる中でやめるほうがカンタンな気がするんだけど。どうも、そうではないみたいですね。

サル そうなんですよー。……うまくいえないんですけど、ボクがやめてるっていう、それだけのことじゃあなくて……なんだろう、ウキ？ ウキキ？

相談員 自分ひとりでやめるときって「やめてることの実感」すら、なかったりしますよね。

サル そうなんです……この「一日の重さ」って、いったい、何なんだろう。

相談員 ……それが、「シラフで生きること」の重みなんじゃないかな？

サル シラフで生きることって、楽じゃないですね……ひとりでやめてたときは、こんなふうにつらくはなかった。ただクスリをやめてることだけが、シラフじゃなかったんだな、って思います。

相談員 そうですね。僕たちの回復は、クスリの使用をやめることがゴールじゃないんです。「酔う」ことをやめて、シラフの生きづらさを認めて、新しい生き方を探し求めていく。その中で、僕たちは酔っ払っていたときは比べ物にならないくらい大切なものに出会っていくんです。

サル ちょっとわかる気がします。なんていうか、今回のクリーンは、ボクがボクの力で作ったものじゃない。うまくいえないんですけど……「もらったもの」だから、だいにしよう、って。そういう気持ちなんです。

相談員 もらったもの……？

サル 今まで、使っても、やめても、ボクだけの話だった。やめてることなんか、どうでもよかった気がする。だいにしよう。今は、もう使いたくない、というボクの気持ちプラス……誰がどうしてくれた、とか、ミーティングで仲間が何を言った、とか、そんなことでもなくて……でも……ボクのじゃない力が、ボクを支えてくれている。使わないでいる生活をさせてくれている……そんな気がするんです。

相談員 サルさん、ハイパーパワーに出会ったんだねえ……(7)。

サル ボクの力なんて、ほんとにちっぽけなものに思えて……でもそれが、さびしくも、くやしくもない。「ああ、これでいいんだ……もうがんばらなくていいんだ……」って。こんな感じ、生まれてはじめてだ。「ボクが生きてるのは、ボクの力だけじゃない」っていう、この感じを持ち続けることが「新しい生き方」っていうことなのかなあ。

相談員 すごいなあ！「自分を超えた大きな力」がサルさんを正気に戻してくれているんですね！



サル そうかあ.....秘密メニューのことがちょっとずつ、わかってきた気がします。正直言ってバカにしていたんだけど、神さまとか何とか。でも、いつのまにか、こうなっちゃった.....もう仕方ないや(照れ笑い)
相談員 ほんと、仕方ないんですよねえ(笑)。.....このプログラムにいったんつながっちゃったら、もうジタバタするだけムダ。大きな船に乗ったつもりでいたらいいいんですよ。
サル それでいいのかもしれない.....バカみたいだけどボク、ホワイトキータッグを眺めてばかりいますよ。前には持つことすら忘れてたのに。こんな小さなものが、こんなに重くて、誇らしくて.....

その後、ある自助グループ会場で.....

メンバー あれっ、もしかしてサルさん?
サル えっ、.....もしかしてその声は.....相談員さん?
メンバー そうですそうです! うわーうれしい! ミーティングで会うの、はじめてだよ!
サル えへへへ.....実はね、最近、毎日行ってみることにしたんですよ。この会場は今日、初めてだったんです。
メンバー そうかー、よくしてくれたねえ(握手!)
サル へへへ(照れ笑い)。なんか妙な感じですねえ。
メンバー なんか、すごくうれしいよ! 今日、実はなんだか具合悪くて、ミーティング、サボっちゃおうかと思っていたんだ。
サル 相談員さんがそんなこと言って、どうするんですか(笑)
メンバー げげっ、相談員はやめてよ(笑) 電話じゃ偉そうなこと言っているけど、僕はサルさんと同じ、ただのアディクトなんですよ。
サル この会場には、よく来るんですか?
メンバー うん。僕、このセクレタリー(8)やっています。ここは、僕のホーム・グループ(9)なんです。パースデー(10)を祝ってもらったり、グループとしての役割(11)を持ったり.....ホームの仲間は、僕にとって家族のようなものですね。おっ、××美ちゃん!
××美 きゃーかわいい!
サル (驚いて)えっ?! かわいい?! なになに?
××美 きゃああ お猿さんみたーい!
メンバー ぶっ!
サル っていうか.....サ、サルなんですけど.....
××美 サルさんっていうの? ××美です、よろしく! このグループの会計やっています(握手)
サル は、はい。よろしく.....(照)
太 おう、××美!おお、サルじゃねーか! なんだよお前、この会場にも来てるのか? さすがだな、動物的嗅覚! かわいい女の子が来る会場をさっそく見つけたな!
サル い、い、いや.....そういうわけじゃ.....
太 その手はなんだよ、その手は(笑)
サル あ、あ、あわわ.....(振りほどこうとする)
××美 ダメだよー ハグハグ~(ハグする)
太 おおなんだよ、俺にもハグしてくれよ、××美!
××美 やーだよっ きゃーサルちゃん、あったかーい
サル ウ、ウ、ウ.....ウキキー!! (ボ、ボ、ボク、このグループ、ホームにしようかな.....とボンヤリ考えている)
助 おっす、サルちゃん! 酒は止まったか(笑)
サル ウキキー! もう飲んでませんよ! キータッグもらってから!
助 本当かあ? 正直になれよ、尻が赤いぞ!(笑)

司会さて、それでは今日のミーティングは「仲間」というテーマをお願いします。最初に分かち合って下さる方、どなたかお願いいたします。
一同(みんな黙って考えている)
サル ア.....ア.....
一同 !! (みんな、ニッコリ笑ってサルを見る)
サル ア.....アディクトの、サルです!
一同 はい、サル!!

編集部注:「秘密メニュー(=プログラム)」一挙解説!

1. **キータッグ** NA(ナルコティクス・アノニマス)では、クリーン生活1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月、6ヶ月、1年 という節目のときに、パースデーを祝い、仲間たちから記念のキータッグが贈られる。これをもたらるのがすごく嬉しい。
2. **ホワイトキータッグ** ワンデイ(クスリや酒をやめてから一日目)のキータッグ。「JUST FOR TODAY」と書いてある。リラプス(再使用)のたびにもらえる。
3. **中島みゆきの「わかれうた」** 「別れはいつもついてくる 幸せのあとからついてくる それが私のクセなのか いつも目覚めればひとり.....」というたいへん明るい歌。
4. **キータッグを返す** リラプスしたことを認めたと、それまでもらっていたキータッグを全部、返さなくてはならない。これがすごくかない。
5. **スポンサー** 自分の回復に関して何でも話せて、困ったときや苦しいときに提案を与えてくれる相談相手。12ステップの第5「神」に対し、自分自身に対し、もう一人の人間に対し、自分の誤りの正確な本質を認めた」に出てくる「もう一人の人間」。
6. **底をつく** 「Hitting bottom」の邦訳。自分のアディクションによって生きることがどうにもなくなるといふ「どん底の経験」を経て、初めて回復を志す。
7. **ハイヤーパワー** 自分で理解している神、自分だけの考えにしがみついたアディクトたちは、第1ステップで「無力を認め」、第2ステップで「自分より偉大な力を信じ」、第3ステップで「ハイヤーパワー(自分で理解している神)の配慮にゆだねる」ことで、正気の人生を取り戻していく。
8. **セクレタリー** グループのなかの役割のひとつ。会場の鍵を掛けて仲間を迎え入れるのが主な仕事。
9. **ホーム・グループ** 自分が所属するグループ。自分のクリーンのパースデーをそこで祝ってもらう。グループの仲間は家族のようなもの。
10. **パースデー** 自分のクリーン生活がスタートした日をパースデーとし、そこから数えて何ヶ月、何年という節目のときに「パースデー・ミーティング」を開き、仲間同士で回復を祝いあう。
11. **グループの役割** チェア・パーソン(議長)、ヴァイス・チェア(副議長)、会計係、セクレタリー、各コミティ(委員会)の委員、メッセージ係、コーヒー係など、グループを維持するための役割がたくさんある。こうした役割を通じて得られる「一体性」がメンバーの回復に大きな意味を持つ。



この物語はフィクションです。写真と本文はあんまり関係ありません。
 構成:ちえぞう・シゲヤ アドバイザー:ブーさん



サル これは元からだ、ウキキー! みんなしてボクをいじるなー!
一同 またまた~うれしくせに。
サルウ、ウキキー、うれしい...? かもしれない.....
メンバー おーい、そろそろ時間だよ。ミーティング始めるよ!

神無月才生の好評連載

ラブ&マーシー

ビーチボーイズ：
ブライアン・ウィルソンの光と影

第8回 「サーフズ・アップ」

飛び火

1966年11月28日。「神にささげるティーンエイジシンフォニー」「西部への壮大なタイムトリップ」を目指したビーチ・ボーイズの新作LP「スマイル」の制作に暗雲が立ち込める。

「僕は悪戦苦闘している完璧で偉大な音楽、そしてそれを完成できないかもしれない可能性について考え続けていた。僕の頭は、混ぜ合わせた材料を投げ入れた大釜のようだった。常用しているドラッグ、曲を書き、制作しなければならぬというプレッシャー、それはコントロールできない感情のつぼだった。ますます妄想症、パラノイアに陥っていった」

『ブライアン・ウィルソン自叙伝』(中山啓子訳、径書房)より
リーダーのブライアン・ウィルソンは、地、風、火、水の順に進行する組曲「エレメンツ」を準備していた。この日、ロサンゼルスゴールドスタースタジオで行われたセッションは火の部分、起承転結の転に当たる最重要パートだ。

炎のイメージを現場に強く刻むためか、ブライアンは赤い消防士の帽子を被って登場。さらに「全員がこの帽子を被らなきゃ駄目だ」と言い張り、居合わせたセッションミュージシャンに帽子を配った。それだけでは満足できず、さらに大きなバケツの中に火を焚いて、部屋に煙を立ち込めさせ、「ファイアー・セッション」を始めた。

ブンブンと激しくうねるベースラインに乗って、ドラムはダダンッ、ダダンッ、燃え盛る楼閣がついに崩れ落ちるかのよう不安感を醸し出した。傷つきやすく、優しくったはずの天才が作った、最もとがった音が「ファイアー」だ。

翌日、スタジオの隣のビルが全焼。さらに数日にわたりロサンゼルス中で火災が相次いだ。彼は「不吉なバイブレーションを放つ音楽を作ってしまった」と考え始める。



消防士の帽子を被るブライアン・ウィルソン
= 1966年11月

そんな不安を拡大する出来事が数日後、起こった。

ブライアンは映画館に入り、ロック・ハドソンの新作「セカンズ」を見た。人生に挫折した男が整形手術を受けて再スタートするが、結局は元の自分と同じ悩みを抱えていたというストーリー。途中で登場する「ハロー、ミスター・ウィルソン」とうセリフに激しく反応し、自制心を失ってしまう。

奇行もエスカレート。「砂の中でピアノを弾いて、子どもの感性を取り戻したい」と考えたブライアンは、ある日、自宅に大工を呼ぶ。ピアノの周りに大きな柵席のような枠を組み立てさせ、2トンの砂の中へ入れた。さらに玄関に木のおもちゃの家を備え付け、家に入る時には

その中を這ってくらなければならないようにした。

ドミノが崩れる

一方で、「表の顔」はいつも通りの天才。シングル「グッド・バイブレーション」は1千万枚を超えるヒットを記録。12月15日は音楽家レナード・バーンスタインがホストを務めるテレビ番組「インサイド・ポップ」のために、ピアノの弾き語りで「スマイル」からの新曲「サーフズ・アップ」を披露する。

「質に入ったダイヤのネックレス
ハンサムな男が振る指揮棒に誘われて
太鼓の音が鳴り響く
何も理解しちやいない貴族階級
オペラグラスを逆さにして見るかのようだ
穴に落ちた振り子
縦に並んだ廃虚のドミノ…」

「サーフズ・アップ」こそ、ブライアンと作詞を担ったヴァン・ダイク・パークスのコンビが放つ、最高にして最後の傑作バラードだ。彼らは覚せい剤を服用しながら徹夜で書いたそうだが、誰も寄せ付けぬ孤高の輝き、荘厳さで、ロックと言うよりオペラを思わせた。バーンスタインはテレビ番組の弾き語りでの曲を披露したブライアンを激賞した。

歌詞に登場する「縦に並んだ廃虚のドミノ」についてブライアンは当時、こう語っている。「現代社会で起こっていることを言っているんだ。絶対支配、観念、人生、制度、ポップスさえも何もかもがドミノのように崩れ、転がり、崩壊するんだ」

67年1月。キャピトルレコードは1月に、47万枚のレコードジャケットを印刷し、「スマイル」発売のラジオCMを流したが、音は完成せず、発売は延期された。ドラッグの常用はブライアンとヴァン・ダイクから自分の音を客観的に聞く耳を奪っていた。

録音したトラックを再生する。

ブライアンが言う。「分からないな…おい、いいのが駄目なのか、分からないんだ」

「そうなんだ、僕もだ」とヴァン・ダイク。「どうなのか、分からないんだ」

そんな日々が続き、2月、ヴァン・ダイクはプロジェクトから降りる。

きっかけはメンバーのマイク・ラブがスマイル収録予定の一曲「キャビネッセン」の歌詞に文句をつけたことだった。

「おい、『あらわになったトウモロコシ畑、次々にカラスが鳴きだす』ってのは、どういう意味なんだ。おれに言わせたらたわ言だ」とマイクが言うと、ヴァン・ダイクは「崇高な詩とはそういうものだ」と返事したが、マイクは引かない。「僕たちはもう終わったようだな」と言い残し、ヴァン・ダイクは去った。

もっとも、彼の離脱は、ブライアンの周囲に群がる「悪友」たちに嫌気が差していたことも一因だったようだ。「彼らは金の匂いを嗅ぎつけるベテニス師たちだ。僕は君と曲を作ることに没頭したいのに、これでは作業は続けられない」と諭しても、ブライアンは「彼らは僕の友達だ」と聞き入れなかった。

スクラップに

4月10日。「スマイル」制作の現場にビートルズのポール・マッカートニーが訪れる。「白いスーツと赤の革靴を身につけたポールは絵に描いたように格好よかった。彼は含み笑いをした」とブライアンは回想している。

ビートルズには、レノン＝マッカートニーという鉄壁の作曲コンビ、アカデミックにいろんなアイデアを提供して音をまとめるプロデューサーのジョージ・マーティン、キャラクターがそれぞれ違う四人のアイドル性という強い武器が並んでいた。

一方で、ビーチ・ボーイズはライター、シンガー、プロデューサーをブライアンが統括している。そのことにポールは深く敬意を払ったという。

「どうやって客観的になるんだ？」とポールが尋ねると、ブライアンは「頭の中にあるサウンドをいつも作ってるだけなんだ。頭の中で完全にでき上がってるんだ。だけど、それがだんだんむつかしくなってきた」と語った。

ポールはピアノに座り「2、3日前に書いたばかりだ」と言って、1曲奏でた。



『サーフズ・アップ』をTV番組で演奏するブライアン=1966年12月

ブライアンの妻、マリリンは涙を流した。「『シーズ・リーピング・ホーム』って言うんだ」。ビートルズはLP『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』を仕上げる最終段階に来ていた。

「君のアルバムはどんなの、ブライアン？」と聞かれ、「どうか」とブライアンは視線を落とす。「『英雄と悪漢』っていう曲があるんだ。『グッド・バイレション』を超えられるかもしれないと思ってる。ただまとめられないんだ」

そして...

4月14日。ヴァン・ダイクがワーナーとソロアーティストとしての契約を結ぶ。

4月25日。ビーチ・ボーイズのメンバーでブライアンの弟、カールが徴兵拒否によりFBIに逮捕される。

5月2日。キャピトルが「スマイル」制作中止を発表。広報担当は「ここ数カ月のブライアン・ウィルソンの最高傑作は一つ残らずスクラップにされた」と語った。

6月1日。ビートルズが「サージェント〜」を発表。

「僕は正気を失いはじめ、スタジオに行くことをやめた。キャピトルはすぐにスマイルのリリースをキャンセルした。次の週、僕は家にこもり、家族や友人や音楽も締め出して、限りない鬱に奥深く入り始めた。以前は、次のチャレンジをするためにいつも鬱から立ち上がった。どの曲もどのアルバムも、そうして出来上がったものだった。僕は恐怖に打ち勝ってきた。負け犬でないことを立証してきた。そして次なるチャレンジに立ち向かった。音楽を通じて、僕はいつも人生の意義を見つけてきた。しかしいま、音楽さえもう意味をなさなかった」

最後の輝きとなった「サーフズ・アップ」は次のような歌詞で締められる。

「グラスが上がった
バラが燃え上がったような赤色
なみなみと注がれたワイン
ささやかに最後の乾杯
しばらくの別れか、さもなくば死
泣けないほどつらい
それ以上の塞いだ心が僕を襲う
波が来る...これは高い波だな
さあ、激しく来て、僕を包め」

暗示的と言えば、暗示的な歌詞だ。

ブライアン・ウィルソン、24歳。早くも人生の折り返し地点に立ち、これから長い長い下り坂を下りていかねばならぬ彼こそ、「縦に並んだ廃虚のドミノ」そのものだった。

神無月才生(かなづき・さいせい)

音楽・映画評論家。1969年生まれ。英米のロック・ミュージックや香港映画シーンの切り口鋭い批評で知られる。コアな映画ファンの間では彼のホームページが大人気を博している。

神無月才生のホームページ <http://plaza.harmonix.ne.jp/~skz/>

「出会いと別れ」

安高真弓(ウィメンズオフィス・サーブ)

先日、アバリ東京本部で事務局の実務を担当してくれたスタッフの奥津さんの送別会が開催されました。奥津さんは、みんなの願いと妄想がミックスして「ひょうたんからコマ」のように出来たアバリの創設期からのスタッフです。まだ業務の方向性が定まらない創設期から、経済的な基盤の確保のために片っ端から助成金の申請をしたり、印刷からあがってきたパンフレットを何千部も三つ折にして発送したり、私たちが書いた書籍(「薬物関連問題の相談の受け方」など)の受注から発送まで一手に引き受けてくれたのも奥津さんです。

遠い沖縄から時折連絡を入れては無理難題をお願いするのに、いつも「承知しました！」と快く引き受けて、確実にこなしてくれた仕事振りは「プロの技」でした。企画力といい、事務能力といい、奥津さんの仕事は縁の下で目立つことこそ少なかったけれど抜群でした。個人的に一番心に残っているのは、原稿やコラムを送った時に「感動しました！」と喜んでくれること。相談の仕事はずっと続けてきたものの、文章にするのは得意ではありませんし自信がありません。「ちゃんと読んだ人に伝わるだろうか」と不安に思いながら原稿を仕上げた私にとって、奥津さんの「感動しました！」は心強いエールでした。奥津さんの「感動しました！」に励まされ、原稿を書く力をもらっていたと言っても過言ではありません。

薬物やアディクションの問題にかかわることで、私はたくさんの人に会

いました。なんだか川の流れるに逆らわずに流されていたら、どんぶらことアバリにも出会ってしまったような気がします。自分の流れに逆らわずに乗っていく道の途中では、たくさんの仲間との出会いや流れの変化を経験します。初めは同じ流れに乗っていても、それぞれの流れに別れていくこともあります。新しい流れには新しい「出会い」が待っています。「別れ」があっても、その時必要な人にちゃんと出会っていけるようになっているのではないのでしょうか。

奥津さんはアバリを飛び立って、新しく事業を始められるのだそうです。

コツコツ地道な仕事を着実にこなす奥津さんのことです。必要な人との出会いにも、きっと恵まれるでしょう。「感動しました！」が聞けなくなることは寂しいですが、奥津さんが自分なりの流れを見つけて新しい出会いに向かって行かれることには精一杯エールを送りたいと思います。奥津さん、遠い沖縄から応援してるよ！ 今までありがとう！ また、どこかで会えるよね？



ちかし、愛してるぜ！(編集部より)

APARI藤岡 アウェイクニングハウス



アウェイクニングハウスの各プログラム

アウェイクニング・ハウスは、アジア太平洋地域アディクション研究所(APARI)が運営している薬物依存症からの回復のためのリハビリ施設です。

回復のためのプログラムは、自助グループ(NA=ナルコティクス・アノニマス)の手法を取り入れたグループ・セラピーが中心です。入寮者が全員参加するミーティングを毎日行っているほか、夜には地元で行っている地域のNAミーティングに参加しています。

このほか、入寮者が自主参加するかたちで、スポーツ・プログラムや農作業、陶芸、ボランティア活動など、さまざまなプログラムを行っています。

薬物依存症になる人のほとんどが、対人関係が苦手で自分だけの世界に引きこもったり、なにかに依存することで心の葛藤を解決しようとする傾向を持っています。施設では、同じ苦しみと闘う仲間をつくることで孤独癖を解消しながら、ミーティングで正直に自分の話をする事で薬物依存に陥った自分自身の心の問題を内省してもらっています。

東京からJRと車で2時間半。群馬県藤岡市の自然の山々に囲まれた施設で、薬物乱用で荒廃した精神状態を安定させ、病的依存から回復・自立できるような環境と援助を提供しています。



スポーツプログラム



ミーティング風景



農作業プログラム



陶芸プログラム



APARI藤岡研究センター

〒375-0047

群馬県藤岡市上日野2594番地

電話 0274-28-0311 FAX 0274-28-0313

【入寮条件】

- 1、薬物依存から回復・自立をしようとしている本人
- 2、男性(年齢制限はありません)

【入寮期間】

3ヶ月、6ヶ月、12ヶ月の目安はありますが回復の度合いは個人差があるため特に定めません。

【入寮費】

月額16万円(生活保護受給者は応相談)

内訳	施設使用料(共益費含む)	¥60,000
	食費	¥30,000
	生活費	¥35,000
	プログラム・カウンセリング	¥35,000

フェロシップ・ニュース(第八号)

2003年10月1日発行

定価 500円 (年間購読料 5000円)

発行 APARI東京本部

〒110-0015

東京都台東区東上野6-21-8

サニーハイツ東上野1F

電話 03-5830-1790 FAX 03-5830-1791

Email apari@tokyo.email.ne.jp

http://www.ne.jp/asahi/np/apari/